

# 『広田社歌合』注釈(二)

武田元治

前稿に「社頭雪」の最初から「海上眺望」の十番までをとり上げたので、本稿はそれに続く「海上眺望」の十一番から「述懐」の最後までをとり上げる。

## (海上眺望)

十一番

左持

右近中将実宗

79 はりまがたすまのはれまにみわたせばくもるになみのたつかとぞおもふ

右

右馬権頭隆信

80 あさなぎにおまへのおきをこぎでてぞくもをばうみのものとしりぬる

左、すまのはれまにとおき、くもるになみのなどいへるころすがた、いひしれるうたとみえて、いとをかしくこそ侍れ。

右歌も、くもをばうみのなどいへるけしきよまんとおもへるうたとみえ侍えば、持など申すべきにや侍らん。

## 【通釈】

十一番

左持

右近中将実宗

79 播磨の海を、須磨で晴れ間に見渡すと、遠い空の雲のあたりまで、波が立っているかと思われる。

右

右馬権頭隆信

80 朝なぎに、御社前の沖に船をこぎ出して、はるかに見る雲は、海と一つのものど知った。

左の歌は、「須磨の晴れ間に（見渡せば）」と言った上で、「雲居に波の（立つか）」などと詠んだ、その心や姿が、詠み様をよく心得た歌と思われる、大層面白く思います。

右の歌も、「雲をば海の（ものと知りぬる）」など言った様子を詠もうと意図した歌と見えますから、持あたりで判定するのが適当でしょうか。

【注】○はりまがた 播磨<sup>はりまがた</sup>。歌枕。播磨（今の兵庫県南西部）の海。○すま 須磨<sup>すま</sup> 摂津の国の歌枕。今の神戸市須磨区のあたり。播磨の国との境の地。○おまへのおき（広田）神社の前方の海の沖。

【考察】左の歌は須磨での海上眺望、右の歌は広田の沖での眺望という設定であるが、左歌に「雲居に波の立つかとぞ思ふ」と詠み、右歌に「雲をば海のものど知りぬる」と詠んだのは、ともに遠く空と海の接するあたりの、雲と波が一つに見える様子をとらえている。こういう発想は、八番右歌の、

こぎいでてみ沖海原見渡せば雲居の岸にかくる白波

などにも見られたものである。現地の実景に即した作ではないと思われるが、それだけに空と海の続いた広大な空間が強調されて、「海上眺望」の題意は十分に生かされている。

俊成の判詞は、左歌の、上下の句を適切に配置し雲と波の続く遠景を眺望する様子を詠んだ「心姿」について、「言ひしれる歌」と評し、「いとをかしく」見えると評価している。

右歌についても、同様に雲が海に続くに見える様子を詠む作意を認めて、持と判定している。

もつとも、俊成は『千載集』には左歌のみを収めている。これは、その段階では左歌をより高く評価したのであろうか。あるいは、左歌の作者の実宗も、右歌の作者の隆信も、ともに勅撰集の初出は『千載集』であるが、実宗の歌はこの一首だけであるのに対して、隆信の歌は七首が採られているので、俊成が実宗の歌を一首でも入集させようと配慮した結果とも考えられる。

【備考】十一番左歌は『千載集』(二〇四七)に、下句「波は雲居のものにぞありける」の形で収められている。

## 十二番

左勝

81 はるばるとおまへのおきをみわたせばくもぬにまがふあまのつりぶね

右

皇后宮亮季経

82 おきへゆくわれをもともにながむらんかすみわたれるをちのうらりぶねといへるすゑのくも、いとよろしきうたこそきこえ侍れ。左歌、もじつづきうるはしくくだりて、くもぬにまがふあまのつりぶねといへるすゑのくも、いとよろしきうたこそきこえ侍れ。右歌は、ころありてをかしくはきこえ侍るを、おきへゆくわれをもと侍るや、ふねなくてゆくとはいかがとおほえ侍らん。うたがまはをかしくも侍れど、うたあはせのときはすがたをさきとし、なんをのぞく事なれば、なほ左のかちにやとみえ侍るなり。

## 【通釈】

### 十二番

左勝

右近中将頼実

81 はるばると、御社前の沖を見渡すと、空の雲に紛れこむか見える、(小さな)漁師の釣り船の姿があった。

右

皇后宮亮季経

82 沖へ行くわたしが遠く眺めているように、今ごろ、あの一面にかすんでいる遠方の浦でも、浦人がわたしの方を眺めていることであるう。

左の歌は、言葉続きが整って滞らず詠み下され、「雲居にまがふあまの釣船」と詠んだ下の句も、大層結構な歌と思われます。

右の歌は、思い入れが深くて面白いとは思われますけれども、「沖へ行く我をも」とありますが、ここで船のことを言わずに沖へ行くというの、いかがなものでしょうか。歌の様子は面白くは見えますが、歌合の場合は歌の姿を第一に考えて、欠点を避ける配慮が必要なので、やはり左の勝であろうかと思われるのです。

【注】〇くもぬにまがふ 空の雲に紛れて区別しにくい。この語句を用いた先行歌に、「わたのはらこぎいでて見ればひさかたの雲ぬにまがふ沖つ白波」(『詞花集』三八二、藤原忠通)がある。

【考察】左の歌は、はるばると御社前の沖を見渡すと、遠く雲に紛れこむように釣船の姿が眺められる、と詠む。上條彰次氏はこの歌の本歌に関して、

はるばると雲をさして行く船の行く末遠く思ほゆるかな(拾遺集)一一六〇、伊勢)

わたのはらこぎいでて見ればひさかたの雲ぬにまがふ沖つ白波(『詞花集』三八二、藤原忠通)

の二首を挙げ、「本歌二首をもてよめる歌」(井蛙抄)といえるか(『千載和歌集』補注)と指摘されている。着想の上では独自の特長に乏しいとも思われるが、俊成が判詞に言うように、整った姿、滞らぬ声調に特長の見られる作であろう。

右の歌は、沖へ向かう自分が遠く眺めているように、今ごろ、あのかすんで見える遠方の浦の人もこちらを眺めていることだろう、との意であろう。それを「我」を「をちの浦人」が「共に眺む」と詠んだものであろう。異色の詠み様で、作者としては工夫した作かと思う。

俊成の判詞は、左歌については、「文字続きうるはしく下りて」と、整った姿、滞らぬ声調を評価し、下句も「いとよろしき」歌と評する。右歌については、「心ありてをかし」と、思い入れた点は認めるが、船のことを言わずに「沖へ行く我」と詠んだのはどうかと見て、対する左歌を勝としている。

【備考】十二番左歌は『千載集』(一〇四八)に(十一番左歌と並べて)取められている。

### 十三番 左

左京権大夫修範

83 くもはれてよものしまべをみつるかなあまのをぶねになみまくらして

右勝

沙弥寂念

84 あしのはもしもがれにけりなにはがたたまもかりふねゆきかよふみゆ

左うたのけしき心ほそく、すがたもいとをかしくみえ侍るを、あまのをぶねになみまくらしてといへる、よるのうたならば、月ありてぞくもはれまほしく侍る、いかが。

右は、をはりのくのいひとぢめたるほど、にほひすくなきやうに侍れど、しもがれにけりなにはがたなど、めづらしからぬ事なれど、さびても侍れば、なんなきにつきて、右かつべきにや侍らん。

### 【通釈】

#### 十三番 左

左京権大夫修範

83 雲が晴れて、四方の島々の様子を眺めたことであった、——漁夫の小舟の中に旅寝をして。

右勝

沙弥寂念

84 葦の葉も、すっかり霜枯れた、——難波潟に、藻を刈る舟が通って行くのが見える。

左の歌は、歌われた様子が心細く、歌の姿も大層面白く見えますけれども、「あまの小舟に波まくらして」と詠んでいるのが、夜の

ことを歌ったとすると、月があつてこそ雲の晴れるのが望ましいと思ひますが、いかがでしよう。

右の歌は、最後の句の言い切っているあたりの表現が、余情に乏しいようですけれど、「霜枯れにけり難波潟」などと詠んだのは、目新しいとは言えないが、さびた感じもありますので、格別欠点もないことですし、右の勝とすべきであろうかと思ひます。

【注】○なみまくら 波枕。波を枕にして寝るといふ意から、舟の中で旅寝をすること。○たまもかりふね 藻を刈るのに用いる小舟。「玉藻」の「玉」は美称。「玉藻刈る」「藻刈り舟」は、ともに『万葉集』に見える語。○さびて 二番判詞の「さびたる」の注参照。

【考察】左の歌は、漁舟の中に「波枕」して、雲の晴れた折から四方の島々の様子を眺めたと詠む。「波枕」の語を用いた先行歌に、

波枕いかにうき寝をさだむらんこほります田の池のをしどり(『金葉集』二九七、前斎宮内侍)

がある。益田の池でおしどりが浮き寝をするさまについて「波枕」の語を用いたもので、この左歌の海上の小舟で旅寝をする場合は情景がかなり異なるようであるが、「波枕」の語のもたらす頼りない感じは共通しているであろう。左歌のこの点は、俊成が判詞に「左歌のけしき心細く」と評するところに結びつくと思われ、一首を単なる展望の歌にとどまらないものにして思ふかと思ふ。

右の歌は、葦の葉も霜枯れた難波潟に、藻刈り舟の通る姿があらわに見える様子を、簡素な表現でとらえている。

俊成の判詞は、左の歌については、「歌のけしき心細く、姿もいとをかしく見え」と評価する一方、夜の情景であれば月を詠み入れるべきではないかと評する。単に「雲晴れて」と言うだけでは眺望できる状況が整わないというのであろう。

右の歌については、歌の終わりを「行き通ふ見ゆ」と言い切ったのが「にほひすくなきやう」、余情が乏しいようだとしながらも、「霜枯れにけり難波潟」などと詠んだのは「さびて」も感じられ、特に目立つ

た欠点もないと評し、勝と判定している。俊成がここで「さび」の語を用いて評したのは、冬の蕭条とした難波潟の景を、古風とも言える簡素で飾らぬ表現で伝えた点に注目したものかと思う。

この歌合の俊成の判詞の「さび」の用例としては、二番左の藤原実定の歌、

武庫むくの海をなぎたる朝に見わたせばまゆも乱れぬ阿波あはの島山

に次ぐものである。その二番左歌の場合、俊成は「さび」とともに「幽玄」の評語も用いていたが、それは同様に簡素で落ち着いた詠み様ながら、端麗な美女のまゆずみで山影を形容した詩句のイメージを連想させる点があるためと思われる。その二番左歌に比べると、この寂念の歌は、より単純な作と言えるであろうか。

#### 十四番 左

顕広王

85みわたせばおまへのおきのなみまよりかすかにまがふあまのつりぶね

右勝

沙弥道因

86ながめやるころをさふるゑじまかななみちははてもなしとこそきけ

左は、はじめつかたに、おまへのおきをみわたせばと侍りつるうたのもじつづきすこしかはりて、これははじめのいつものことことはなれたるやうに侍るにや。

右は、ながめやるとおきて、なみちははてもなしとこそきけといひすてたるすがた、いとをかしく、ころもあはれにこそみえ侍れば、又以レ右為レ勝。

#### 【通釈】

#### 十四番 左

顕広王

85見渡すと、御社前の沖の波間から、かすかに、波と紛れるように見える、漁師の釣船よ。

右勝

沙弥道因

86はるかに思いをこめて眺めるのを、さえぎって絵島がある、——波路は果てしなく続くということだが。

左の歌は、前の方(十二番左)に、「(はるばると) お前の沖を見渡せば(雲居にまがふあまの釣船)」と詠まれていました歌の言葉続きが少し変わったような作で、この左の歌は第一句(「見渡せば」)が独立したような形になっているかと思えます。

右の歌は、初めに「ながめやる」と言っておいて、終わりに「波路は果てもなしとこそ聞け」と言い捨てた一首の姿が、大層面白く、歌の心も感深いものに思われますので、これも右の勝とします。

【注】○ころをさふる 思いをさえぎる。○ゑじま 絵島。五番の「注」参照。○ことはなれたる 『新編国歌大観』では「ことばなれたる」とする。これは日本古典全書『新訂歌合集』に「詞、馴れたる」とするのと同様の見方かと思われる。これによれば、歌の第一句に置かれた「見渡せば」の言葉は聞きなれている意味に解することになるかと思う。しかし「見渡せば」の語が実際に歌の第一句に用いられた例はあまり多くはないので、第三句に用いられた例が多いようである。〔詞花集〕に例をとると、この語を第一句に用いた歌はなく、第三句に用いた歌が二首見える。『千載集』では、この語を第一句に用いた歌は一首見えるが、第三句に用いた歌が十一首見える。それで、『平安朝歌合大成』に「言離れたる」とする見方が示され、また「事離れたる」と見ることもできるかとも思うので、そういう見方によって解しておきたい。

【考察】左の歌は、社前の沖合に釣船がかすかに見える様子をとらえた作である。俊成の判詞にも言うとおり、十二番左の頼実の歌、

はるばるとお前の沖を見渡せば雲居にまがふあまの釣船

に着想も表現もよく似ている。ただ二首を比べると、頼実の歌の方が言葉の続け様が自然で、姿も整っているのではないか。

右の歌は、海上はるかに思いをこめて眺める視界を絵島がさえぎる

と言ひ、「波路は果てもなしとこそ聞け」とつぶやいたような作である。はるかな波路のかなたにあこがれる心が感じられる、独自の歌であるう。

俊成の判詞は、左歌については、十二番左歌と言葉続きが似ているが、少し違う点として第一句に「見渡せば」を置いた点を挙げる。その部分で「初めの五文字の」に続く語句は、「言葉慣れたる」なのか、「言離れたる」または「事離れたる」なのか、問題があると思うが、一応「注」に記したように見ておきたい。

右歌については、「ながめやる」と歌い始めて「波路は果てもなしとこそ聞け」と詠んだ姿を「いとをかし」と言ひ、心も「あはれに見え」と評し、勝としている。

#### 十五番 左

賀茂政平

87 やまのはもみえぬなみちは月も日もうみよりいでてうみにいりけり

右勝

惠盛

88 ほのみゆるかたやしきつのうらならんなみまにうかぶまつのむらだち

左歌、やまのはもみえぬなみちにとおもひよれるころ、いとをかしく侍り。なみよりいでてなみにこそいれといへるふるうたあるやうにぞおほえ侍れど、これはころかはりたるにや。

右歌、一番のうたにや又このころ侍りつれど、かたやしきつのうらならんといへるすがた、いとよろしくこそみえ侍れ。

左は風情あり。右はすがたをかし。おもひわづらはれ侍れど、なほ、なみまにうかぶといへるすゑのくもをかしきこゆれば、右のかちと申し侍りぬ。

#### 【通釈】

#### 十五番 左

賀茂政平

87 山の尾根も見えない波路、ここでは月も日も、海から出て海に沈むのであった。

88 ほのかに見える所は、敷津しづの浦であろうか、——波間に浮かんで松林が見える。 右勝 惠盛

左の歌は、「山の端も見えぬ波路」と思ひ及んだ着想が、大層面白いと思います。ただ「都にて山の端に見し月なれど」波よりいでて波にこそ入れ」と詠んだ古歌があるように思うのですが、この左歌はそれとは心が異なっているでしょうか。

右の歌は、一番の歌でしたか（波間よりほのみどりにぞ見えわたるこや住吉の松のむらだち）に、やはりこの右歌のような心が見られたのですけれども、「かたや敷津の浦ならん」と詠んだ歌の姿が、大層結構に思われます。

左は趣向（の面白さ）が認められる。右は歌の姿が面白い。それで、どちらを勝るとするか悩まざるを得ないのですが、やはり「波間に浮かぶ（松のむらだち）」と詠んだ下の句も面白く思われるところから、右の勝と判定しました。

【注】○しきつのうら 敷津の浦。撰津の国の歌枕。今の大阪市住吉区の住吉神社の西方の海浜。『万葉集』には「住吉すみのえの敷津の浦（三〇九六）」と見える。○なみよりいでてなみにこそいれといへるふるうた 「通釈」に引用した歌。『土佐日記』一月二十日のところに出ている。『後撰集』（二三五）では紀貫之の作として、下句「海よりいでて海にこそ入れ」の形で見える。○風情 趣向。

【考察】左の歌は、山の端も見えない波路では月も日も「海よりいでて海に入りけり」と詠む。これは『後撰集』に見える貫之の歌、

都にて山の端に見し月なれど海よりいでて海にこそ入れ（二三五五）

と着想も表現も類似する。

右の歌は、海上遠くほのかに見えるのは敷津の浦だろうかと言ひ、その風景を「波間に浮かぶ松のむらだち」と詠んでいる。これは俊成が判詞に言うとおりの、一番右の重家の歌、

波間よりほのみどりにぞ見えわたるこや住吉の松のむらだち

の情景に似通ったところがあるけれども、左歌の場合のような先行歌の影響の濃い作というわけではない。広田社の社前からの海上眺望の歌を叙景的に詠んだ結果、二首が似たものになったのである。

俊成の判詞は、左歌については、その着想を「いとをかし」と評価している。ただ、古くこれと似た貫之の歌があることに触れて「これは心変りたるにや」と言っている。

右歌については、「方や敷津の浦ならん」と詠んだ部分を引いて、歌の姿が「いとよろしく」見えると言ひ、「姿をかし」とも評価している。また浦の松林を「波間に浮かぶ」と詠んだ点も「をかし」思われるとして、右の勝とする。

十六番 左持

賀茂重保

89 おきつうみやしほちにそらのまがふかなくもにやなみのたちかかるらん

右

通清

90 いづかたへゆくともみえぬあまをぶねくものなみまにはてはかくれぬ

左右ともに眺望のころはるかにして、いうにみえ侍り。よりて持とす。

【通釈】

十六番 左持

賀茂重保

89 沖合の海は、潮路に空が紛れて見える、——雲に向かって波が立ち、かかっているのでしょうか。

右

通清

90 (遠い沖合に)どこへ行くとも見えない漁師の小舟がいたが、しまいに雲の波の間に姿を消してしまった。

左右の歌は、ともにはるかに眺望する心があつて、優れた作と見えます。それで持とします。

【注】○おきつうみ 沖合の海。海の沖の方。「おきつ」は、沖の意

であるが、「沖つ風」「沖つ白波」「沖つ鳥」という風に用いられ、「沖つ海」の用例は珍しい。『夫木抄』には「沖つ海みなそこ深く思ひつつ裳引きならし菅原の里」(二四八二四、よみ人しらず)の一首が見えるが、これは『万葉集』(四四九<sup>一五</sup>)の石川女郎の歌の第一句「於保吉宇美能」(大きな海)を読み誤つたものらしい。○くものなみま 雲の波の間。「雲の波」は、雲のように重なる波、または波のように重なる雲。ここでは遠い沖の波と雲とが区別がつかずつながつて見える状態について言う。

【考察】左の歌は、海が沖合で空と続いて見える様子をとり上げ、「雲にや波の立ちかかるらん」と詠む。右の歌は、遠い沖の小舟が動くとも見えなかったが、しまいに「雲の波間」に姿を消したと詠む。左右とも平明に詠まれている。それぞれの着想は、これまでに見た歌に似たところもあるが、独自性がないわけではないと思う。

俊成の判詞は簡単で、左右ともに海上はるかに眺望する心があり、優れて見ると評して、持と判定している。

十七番 左持

資隆

91 なみのうへにすだくとりかともみゆるかなとほざかりゆくむろのともぶね

右

経正

92 こぎいでてあれやゑじまとみわたせばなみにけたるまつのむらだち

左歌、ことにめづらしきふしにはあらねど、むろのともぶねのすだくとりかともみゆるむころ、をかしくみゆ。

右歌、なみにけたるまつのむらだちなどいへるすがたことば、めづらしくみえ侍れば、いづれもとどりにて、持と申し侍るべし。

【通釈】

十七番 左持

資隆

91 波の上に群がる鳥か見える、——遠ざかってゆく、室の友船の姿は。

右

経正

92 船をこぎ出して、あれが絵鳥かとはるかに見やると、波にかき消されるように(かすかに)松林の姿があつた。

左の歌は、特に目新しい見所とは言えないけれど、室の友船が群がる鳥かと思えたという着想が、面白く思われる。

右の歌は、「波に消たる松の群立ち」などと詠んだ歌の姿や言葉が、目新しく見えますから、左右それぞれ特長があるので、持と判定しましょう。

【注】○すだく 群がり集まる。○むろ 播磨の国の室(室の津、室津)であろう。ここは今の兵庫県揖保郡御津町室津で、古来瀬戸内海

の重要な港であつた。『万葉集』(三二七四)に「室の浦」と詠まれ、平安時代には『散木奇歌集』(八〇六)に「室は浮き津と聞きしかど」と詠まれている。この歌合の奉納された広田社の西方に遠く離れた所で、「むろの友船」と言うのは、室の津を母港とする船団であろう。○とも

ぶね 友船。連れ立って航行する船。○ゑじま 絵島。五番の「注」参照。○けたる 消される。「けた」は「消つ」の未然形。○ふし 見どころ。

【考察】左の歌で、沖の船を鳥かとする着想は、一番左歌等と同様であるが、この場合単独の船でなく「友船」で、それを「すだく鳥」と見た点に、新しさがあるとも言える。

右の歌の、遠い海上の松林がかすかに眺められる風景も、一番右歌と似ているが、一番右歌で「ほの緑に」に見えるところを、ここでは「波に消たる」と表現している。

このような左右の歌の特徴的な点に、俊成は判詞で触れている。そして左歌については、心(着想)を「をかしく見ゆ」と評し、右歌については姿言葉という表現の面で「めづらしく見え」と評して、持

と判定している。

十八番 左持

広季

93 みわたせばおきのしほちにくもひちてそらかうみかもわきそかねつる

右

広言

94 わたのはらくもゐはるかにこぎいでてゆふひにまがふあけのそほぶね

ね

左は、ことばふり、すがたさびて、よろしきうたといひつべし。

右は、あけのそほぶね、ゆふひのいろにまがへたるころ、又をかしくみゆ。だいのころはおなじく、うたのすがたはとりどりなり。よりに又為持。

【通釈】

十八番 左持

広季

93 見渡すと、沖の潮路に雲が低く垂れて、空か海も見分けることができなかつた。

右

広言

94 海原の、空と続く遠い沖までこぎ出して、さながら夕日と見える赤い船よ。

左の歌は、言葉が古風で、姿がさびて、結構な歌と言うべきであろう。

右の歌は、「あけのそほ船」が赤い夕日かと思えたと言んだ心が、また面白く思われる。(「海上眺望」という)題の意味するところは同様に詠まれているが、左右の歌の姿はそれぞれ特長がある。そこで、これも持とする。

【注】○ひちて (水に) 浸って。「ひつ」は、水につかる意。○あけのそほぶね 赤く塗った船。五番の「注」参照。○さびて 二番判詞の「さびたる」の「注」参照。

【考察】左の歌は、沖の潮路に雲が垂れて、海と空が見分けがたい

様子を詠んでいる。着想は基本的には十六番左歌などと同様だが、古風とも見える率直な表現で、おおらかに詠み下した作である。

右の歌は、沖の「あけのそほ船」に注目している点で、五番左の観蓮の歌、

波の上に浮かぶ木の葉と見ゆるかなこぎはなれゆくあけのそほ船と同様であるが、この広言の右歌は「夕日にまがふ」と詠み、船の赤い色を印象的に伝えている。

俊成の判詞は、左の歌については、「言葉古り、姿さびて、よろしき歌」と評する。この歌合の海上眺望の歌に対する俊成の判詞の「さび」の用例としては、「空が海かもわきぞかねつる」といった言い方が、「波か雲かとわきぞかねつる」（『貫之集』四六八）のような、後世に使用された例の少ない言い方によっている点などを指したのであろうか。そして、その点も含めて、古風で飾らぬ表現で、沖の潮路に雲の低く垂れた風景を詠んでいるのを、「姿さびて」と評したのかと思う。

右の歌については、心（着想）が「をかしく見ゆ」と評している。右歌に用いられた「あけのそほ船」の語も『万葉集』に見える古語に違いないが、その赤い色を「夕日にまがふ」と見立てた点に着想の重点を置いた歌は、「をかしく」は見えても、「姿さびて」とは言えないのであろう。それで俊成は「歌の姿はとりどりなり」として、持と判定している。

### 十九番

左持

95 はるばるとしまづたひするもかりぶねやがてくもゐのなみにきえぬ  
る

親重

右

96 わたのはらはるかにいづるあまぶねはくものなみをもわくるなりけり

朝宗

左のもかりぶね、右のつりするあま、なみにきえ、くもをわけた

る、ことばばかりぞかはりて侍れど、題のころ、うたのほど、おなじくみゆ。なほ又為侍持。

### 【通釈】

十九番 左持

95 はるかに島依いに行く藻を刈る船が、そのまま空の雲の波の中に姿を消した。

親重

右

96 海原をはるかにこぎ出した漁師の小船は、雲の波まで分けて行くのだった。

朝宗

左の「藻刈り船」と、右の釣りをする「あま船」と、また（左の）「波に消え」と、（右の）「雲を分くる」と、言葉だけは変わっていきますけれど、題を詠んだ心も、歌の程度も、二首は同じように見える。やはりこれも持とする。

【注】○もかりぶね 藻刈り船。（食用の）海藻を刈り取って運ぶ船。○くもゐのなみ 雲居の波。「雲の波」と同様の意味。ここは雲が重なって波と区別がつかず続く様子を言う。

【考察】左右の歌は、海上をはるかに遠ざかる小舟が、海に続くと見える空の「雲の波」の中に入る様子を詠み、よく似た二首である。

俊成の判詞は、その点に触れており、「題の心、歌のほど、同じく見ゆ」と評して、持としている。

### 二十番

左持

97 しまがくれみえみみえずみゆくふねのはてはくもゐにきえぞしにける

季広

右

98 はるばるとなみちこぎゆくふねよりも風にさきだつかこのころかな  
左歌、すがたころはいうに侍り。すゑのくのことばつづきぞ、  
いかにぞや、さらでもときこえ侍り。

伊綱

右歌は、こころめづらしく、ことばをかしくは侍るを、かこのこ

ゑのさきだたむこと、眺望のためはそのえうなくや侍らん。いづれもかたん事はいかかとて、持又如し前云云。

【通釈】

二十番 左持

季 広

97 鳥陰に、見え隠れしながら（遠ざかつて）行く船が、その果てには、雲の中に消えうせてしまった。

右

伊 綱

98 はるかに遠く、波路をこいで行く船の姿よりも、風で先立って、船乗りたちの掛け声の方が、確かに届く。

左の歌は、姿や心は優美です。（ただし、）下の句の言葉の続け様は、どういうものか、このような（強調した）言い方でなくてもよいのでは、と思われまます。

右の歌は、その心（着想）が目新しく、言葉の用い様も面白くは見えるのですが、船乗りの声が先立つようなことは、（題の）眺望を表現するためには、詠み入れる必要のないものかと思えます。

それで左右いずれも勝とするのは問題がありそうなので、これも前と同様、持ということにします。

【注】○みえみみえずみ 見えたり見えなかつたりして。十番の「注」参照。○かこのこゑ 船乗りの掛け声。水夫たちが船をこぎ進める時にそろって発する掛け声である。『万葉集』（五〇九、三三三七）に用例が見える。

【考察】左の歌の着想の基本は、小舟が進んでいつて沖の雲の中に姿を消すというので、その点類歌が多いが、特に前の十九番左歌、

はるばると鳥づたひする藻刈り船やがて雲居の波に消えぬる

とよく似た作である。とりわけ下句は類似するが、比較すると、これは「はては雲居に消えぞしにける」と、「はては」と言い、係助詞「ぞ」を用い、強調した表現が目立つ。

右の歌は、『万葉集』に用例（五〇九、三三三七）のある「かこの声」を復活させて用い、その掛け声が遠い海上の船の姿よりも確かに伝わる、

と詠んだものであろう。「海上眺望」の題に「かこの声」に重点を置いて詠んだ異色の作で、題意を生かす観点からは、俊成の判詞のような批判を受けることになる。

俊成の判詞は、左歌については、姿・心は「優」であると評価する一方、下句の言葉続きを「さらでも」と問題視している。表現に強調の度が過ぎて遠くかすかな感じを損なう点を指摘したのであろう。

右歌については「心めづらしく、言葉をかしく」と評価する一方、「かこの声」が先立つと詠んだのを「海上眺望」という題から見て問題視している。それで左右それぞれ長所とともに問題点もあることから、持としている。

二十一番 左持

顕綱王

99 わたのはらなみにおりあるしらくものはるればそらぞみきはなりける

右

隆 親

100 はるばるとおきつしほちをみわたせばくもゐにきゆるあまのつりぶ

ね

左右ともに、だいのころ、さきさきも待るおなじころなるにとりて、左は、みぎはなりけるといへるや、あまりささへてきこゆらん。

右は又、さきにおまへのおきと侍りつる歌の、これはおきつしほぢにといひ、くもゐにまがふを、これはきゆるとよまれたるばかりぞ、かはりて侍りける。これはさらでもありぬべけれど、なんにはおよばず。なほ持とすべし。

【通釈】

二十一番 左持

顕綱王

99 海原の、波に垂れこめていた白雲が、晴れてみると、空が（波の向こうの）汀だったのだ。

右

隆 親

100 はるばると、沖の潮路を見渡すと、空の雲の中に消えてゆく、(小さな) 漁師の釣船の姿があった。

左右の歌はいずれも、「海上眺望」という題についての着想が、これまでの歌にも見えましたのと同様の心だが、それにつけて言えば、左の歌は、空が「みぎはなりける」と詠んだのだが、あまりにも(度を超えた表現で)耳障りに思われる点があるか。

右の歌はまた、前に(十二番左歌で)「お前の沖を」と詠んでいましたところを、これは「沖つ潮路を」と言い、「雲居にまがふ」と詠んでいたのを、これは「(雲居に)消ゆる」と詠まれた点だけが変わっている(よく似た)作です。この点は、そのように似た詠み様でないのがよいに違いないけれど、(模作でない以上)非難するわけにはゆかない。やはり持としておこう。

【注】○おりある おりて、そこにある。○ささへてきこゆ 耳障りに聞こえる。こういう意味の「ささへて」の用例は、『無名抄』に、基俊が俊頼の歌を非難した言葉として記された、「いかに歌は、腰の句の末に、て文字すゑたるに、はかばかしき事なし。ささへていみじう聞きにくきものなり」にも見えるところである。ただし、基俊の言葉の場合は、主に歌の声調の面に関して言われたと思われるが、この俊成の判詞の場合は、「空ぞ汀なりける」という表現ないし内容について言ったと見られる。

【考察】左右の歌は、いずれも海が沖で空に続くに見える様子を取り入れた作であるが、左歌は、垂れこめた白雲が晴れると、「空ぞ汀なりける」と詠む。こういう空を(海に向こうの)汀ととらえることは目新しく、近い例としては八番右歌で空を「雲居の岸」と言った場合くらいであろうか。ただ、空が汀だというのは、俊成の判詞で指摘するように、素直に受けとりにくいところもあるであろう。

右の歌は、はるかに沖を見渡すと、空の雲の中に船が姿を消すと見えたことを詠む。これは俊成が判詞で言うのとおり、十二番左歌、はるばるとお前の沖を見渡せば雲居にまがふあまの釣船

と類似した作で、第二句と第四句の一部との語句が異なるだけの類歌である。

俊成の判詞は、左右の歌の着想が、ともに先に出ていた歌と同様であると言った上で、左歌については、空を汀として詠んだのは、「ささへて」、耳障りに思われると批判する。

右歌については、十二番左歌と同類の作になっている点を指摘している。終わりの方で「これはさらでもありぬべけれど」と言うのは、文意が明確にとらえにくいのが、一応「通釈」のように解してみた。それに続いて「難には及ばず」とあるのは、先に置かれた十二番左歌と同類の作になった点は別に右歌の作者の責任に帰すべき問題でないため、右歌を非難するわけにはゆかないと言い添えたのである。広田社で披講することを予定して、「海上眺望」という兼題で多数の作者が短歌を詠めば、他人の歌を模倣しなくても類歌が生まれる可能性は否定できないと思う。

#### 二十二番 左勝

仲綱

101 うなばらやくもぬはるかにこぐふねをうききにのれる人かとぞみる  
右 佐

102 おほつかなゆくかかへるかあまをぶねみえみみえずみなみがくれし  
て

左のうききにのれる、これ又蜀郡<sup>シヨクケン</sup>靈槎<sup>レイサ</sup>張騫<sup>テンケン</sup>が漢<sup>カン</sup>に昇<sup>ノボリ</sup>しかとうたがへるなるべし。ころをかくし侍めり。人かとぞみるといへるや、すこしささへたるやうにきこゆれど、ただ張騫がうききにやといへるなるべし。

右歌は、ことなるなんなどは侍らねど、ただいひわたしたる心ちして、むげにさせるふしなくや侍らん。よりて左のかちと申すべきにや。

#### 【通釈】

二十二番 左勝

仲綱

101 海原の、(沖の)雲のあたりに、はるかにこいで行く船を、浮き木に乗って(天の川まで)行った人の姿かと思えるのです。

右 佐

102 どうもはつきりしない、——行くのか帰るのか、(遠くの)漁師の小舟は、見えたり見えなかつたり、波に隠れなどして。

左の「浮き木に乗れる」と詠んだのは、やはり蜀郡の靈妙なからだの乗り手、張騫が、天の川にいかだを進めた姿かと思つたという心であろう。その作意は面白いように思います。ただ「(浮き木に乗れる)人かと思える」と言つたのは、(船を人かと思つた点で)、少し耳障りに思われるけれど、これはただ張騫の浮き木であろうかと思つたのであろう。

右の歌は、格別の欠点などはありませんが、一通り言つてみたという感じで、全くこれという見所のない作でしょうか。それで、左の勝と申すべきかと思ひます。

【注】○うきぎにのれる人 浮き木に乗って(天の川まで)行った人。張騫を指す。張騫は漢代の人で、浮き木(いかだ)に乗り、黄河の源流をたどつて天の川までさかのぼり、牽牛・織女のいる所に達したという伝説で知られる。この伝説は日本にも伝えられ、早く『懷風藻』の詩(四七)や『本朝文粹』(卷三)所収の対策(七番「注」参照)に影響の跡が見られ、まとまつた話としては『今昔物語集』(卷十、第四)、『俊頼髓腦』その他に記されている。○蜀郡 靈槎張騫が漢に昇じか右側の片仮名は、原文に添えられた読み仮名。「蜀郡」は、今の中国の四川省に昔置かれた郡の名で、張騫の伝説関係では『博物志』にその名が見える。(ただし張騫の出身地としてではなく、天の川から帰つて後行つた所とされる。ちなみに張騫は『前漢書』に「漢中之人」とある。)「靈槎」の「槎」は、いかだ。「漢」は、天漢、天の川。「昇」は原文の読み仮名によって「ノボス」と読めば、上流へ向けて進める意。『万葉集』に「いかだに作りほすらむ」(五〇)の用例がある。掲出した判詞の文言は十分に理解しにくい点があるが、以上のことから

ら一応「通釈」のように解しておく。○ささへたるやうにきこゆれど 二十一番の「ささへてきこゆ」の「注」参照。この場合も(船を「人か」と見ると言つた)言い様について、耳障りに思われると評したのであろう。

【考察】左右の歌は、ともに遠い沖に見える船の姿をとり上げているが、左の歌は、その船の姿に、張騫が乗って天の川まで行つたという「浮き木」の面影を思い浮かべている。それで発想の基本は、七番左歌、雲の波分け行く船の消えぬるは天の川原にこぎやつける

と同様であるが、これはまだ船の姿の見える状態に即して詠み、趣を異にしている。張騫の「浮き木」を詠み入れた先行歌は、『躬恒集』の歌(一一)以下少なくとも、それらにも同類のものはないようである。

右の歌は、遠い船の姿を「おぼつかなく帰るか」と一・二句に詠み、「見えみ見えみ波隠れして」と四・五句に詠んで、船のかすかに見える様子を繰り返して伝えていく。ただ表現の眼目となる語句は、先行歌に「来るか帰るかおぼつかなく」(『頼基集』三)とか、「見えみ見えみ」(『後拾遺集』四四ほか)とかの例があり、新しいものではない。

俊成の判詞は、左歌については、張騫の浮木伝説を生かした着想を、「心をかしく」と評価する。ただ、船を「人か」と見ると言つた言い様は氣にしたようで、「すこしささへたるやうに」思われることを言い添えている。

右歌については、部分的な問題点などはないが、全体として「ただ言ひわたしたる」感があり、「むげにさせるふしなくや」と言う。一通りのことは詠んでいるが、これという見所がないと、かなり厳しい批判である。

二十三番 左持

季 定

103 こぎはなれしほちをゆけばあはちしまくるまでもながめつるか

な

右

広盛

104 なみごしにやへのしほちをみわたせばあまのともぶねかずぞきえゆ  
く

左歌、すがたはよろしくみえ侍るを、しものくや、かのかくるる  
までもかへりみしはやといへる名歌の、めでたく侍れば、いかか  
ときこえ侍るなり。歌は古歌一二句とるはつねの事なれど、さく  
らちるなどおく事は、はばかりべく侍るなり。

右歌も、うたざまをかしくは侍るを、なみごしにとおきては、そ  
のしまかのやまなどぞあらまほしき。やへのしほちもなみぢなれ  
ば、おなじ事のやうにや侍らん。これも常の例に持とすべし。

【通釈】

二十三番 左持

季定

103 船出して岸から離れ、海路を行くにつけ、淡路島が見えなくなるま  
で、つくづく眺めたことだった。

右

広盛

104 波の向こうに、遠く続く海路を見渡すと、連れだつ漁師の船が次第  
に姿を消し、少なくなつてゆく。

左の歌は、その姿は結構に見えますが、下の句は、あの「隠るる  
までもかへりみしはや」と詠まれた名歌が、立派でありますだけ  
に、(同様の表現が)どうかと思われのです。歌は古歌の一二句  
程度を取り入れて詠むのは普通のことだが、「桜散る」などと(名  
歌の句を取り入れて)詠むことは、避けるべきなのです。

右の歌も、歌の姿が面白いとは思いますが、「波越しに」と言った  
のなら、次に何島とか何山とかの言葉が置かれるのが望ましい。  
「八重の潮路」も波路に属するのだから、同じことを(繰り返し)して  
言ったような感じにならうかと思えます。それでこの左右の歌も、  
いつもの例によって持と判定しよう。

【注】○あはぢしま 淡路島。三番の「注」参照。○やへのしほち

八重の潮路。「八重」は、ここでは波が幾重にも重なっている意。はる  
かに続く海路を言う。藤原節信の歌「はるばると八重の潮路におく網  
を……」(『後拾遺集』四一)あたりが古い用例で、平安時代後期に歌  
語として用いられた。○かくるるまでもかへりみしはやといへる名歌

菅原道真が大宰府に左遷された時の歌、「君が住む宿のこずゑをゆく  
ゆくとかくるるまでもかへりみしはや」。これは『大鏡』所載の歌形で、  
『拾遺抄』(二二七)では第四句「隠れしまでに」とあり、『拾遺集』(三  
五一)では第二句「宿のこずゑの」、第四句「隠るるまでに」と見える。  
しかし俊成の『古来風体抄』には「大鏡」と同じ歌形で掲出する。○  
さくらちる この句を第一句とした有名な歌に、「桜散る花の所は春な  
がら雪ぞふりつつ消えがてにする」(『古今集』七五、承均法師)と、  
「桜散る木の下風は寒からで空に知られぬ雪ぞ降りける」(『亭子院歌合』  
一三、『拾遺集』六四、紀貫之)の二首がある。俊成は『古来風体抄』

にこの二首をともに選んでいる。ただ定家は『近代秀歌』に「桜散る  
木の下風などはよむべからずとぞ教へ侍りし」と記しており、これに  
よれば主に後者の貫之の歌が考えられていたことになる。

【考察】左右とも、「潮路」を詠み入れているが、左の歌は、遠い「潮  
路」の船旅に向く身として、後にする淡路島に心を引かれ、その島  
影が隠れるまで眺めたとの心であろう。

右の歌は、波越しに「八重の潮路」を見渡すと、「あまの友船」が遠  
く小さく眺められたが、次第に姿を消して数が減ってゆくと見えた  
詠んだものであろう。

俊成の判詞は、左歌については、「姿はよろしく」見えるが、「隠る  
るまでもながめつるかな」という下の句が、菅原道真の名歌、

君が住む宿のこずゑをゆくゆくと隠るるまでもかへりみしはや  
の下旬と類似する点を問題視している。そして、古歌の一二句を取り  
入れて詠むのは一般に行われることだが、「桜散る」などの古歌の有名  
な句をそのまま取り入れるのは避けるべきだと言っている。これは、  
道真の歌の特長のある下旬の表現を、類似した形で同じ下旬に用いた

点を問題にしたのであろう。こういう俊成の見解は、定家に継承され、『近代秀歌』、『詠歌大概』、また『毎月抄』に見られる本歌取りの心得にまとめられたと思われる。

右歌については、「歌ざまをかしく」は見えるが、「波越しに」に続く言葉は島や山の名であるのが望ましく、「八重の潮路」ではこれも「波路」なので、同様の事を重ねたと見える点を問題視している。左右ともに長所がある一方問題点ももつので、持とされる。

### 二十四番 左

邦 輔

<sup>105</sup>わたのはらなみぢはるかにゆくふねのややみるままにくもにきえぬる

右勝

安 心

<sup>106</sup>もしほやくけぶりたつらしみわたせばうすぐもまがふあはぢしまやま

左、すがたは優に侍り。くもにきゆるところ、いまはあまりにめなれ侍りて、とかく申しやりがたくぞなりにて侍る。

右、このうすぐもは、けぶりたつらしとおきて、うすぐもまがふといへる、よろしくみえ侍り。以て右勝と申すべし。

### 【通釈】

### 二十四番 左

邦 輔

<sup>105</sup>海原の、波路をはるかに行く船が、しばらく見ているうちに、雲の中に姿を消した。

右勝

安 心

<sup>106</sup>藻塩を焼く煙が立ちのぼっているらしい、——見渡すと、薄雲のように淡路島の山影がある。

左の歌は、姿は優美であるように思います。ただし、(沖の船が)雲の中に姿を消すという着想は、もう余りに見慣れまして、なにかと申し述べる言葉を記しにくくなつてしまいました。

右の歌で、詠まれている薄雲は、「煙立つらし」と言つた上で、「薄

雲まがふ」と詠んでいるのが、結構に思われます。右の歌を勝と判定しましょう。

【注】○もしほやくけぶり 藻塩焼く煙。塩をとるために、潮水を注いだ海藻を焼く煙。

【考察】左の歌は、遠い沖を行く船が雲の中に姿を消すと見えたことを平明に詠んでいる。ただ、こういう着想の歌は、俊成が判詞で言うように、この「海上眺望」の歌の中に少なくないので、二十番左歌、島がくれ見えみ見えずみゆく船のはては雲居に消えぞしにけるや、十九番左歌、二十一番右歌などにも同様の作が見られる。

右の歌は、淡路島の山影が薄雲に見まがう様子を、「藻塩焼く煙立つらし」と推量した作である。淡路島を藻塩焼く地としてとらえることは、『万葉集』の笠金村の歌(九四五)にも見られるが、左歌の場合のよくな類歌のある作ではない。あえて似た着想の歌の先例を求めるならば、大中能宣の、

田子の浦に霞の深く見ゆるかな藻塩の煙立ちやそふらん(拾遺集) 一〇一八)

などが考えられる。しかし、右歌がそれを模した作とは言えないであろう。

俊成の判詞は、左歌については、「姿は優」と評価する一方で、船が雲に消えるという着想の作が見慣れたものである点に触れている。そして右歌については、「藻塩焼く」煙立つらしを、「薄雲まがふ(淡路島山)」に対応させた表現を、「よろしく見え」と評価して、右の勝としている。

### 二十五番 左勝

懷 綱

<sup>107</sup>ながめこしあまつくもるはなだぶねのこぎゆくさきにありけるものを

右

祐 盛

<sup>108</sup>しらくもにつづくしほちをながむればいづれをなみとえこそみわか

ね

左右いづれもよろしきうたとはみえながら、右は、あまたみえ侍るうたとも、くもとなみにまつはれて、おもひわきがたく侍るうへに、つづくしほちをといへる、ききよくしもあらぬにや。

左は、なだぶね又優にしもあらねど、ながめこしあまつくもるはなどいへる心、よろしくみえ侍れば、左のかちと申し侍りぬ。

【通釈】

二十五番 左勝

懐綱

107 これまで（ものを思いながら）仰いできた空は、今見ると、灘船のこいでゆく先にあるのだった。

右

祐盛

108 白雲に続く潮路を眺めると、いずれを波とも、見分けることができなかつた。

左右の歌は、どちらも結構な歌とは見受けられるが、右の歌は、これまでに多く見られました歌と比べて、雲と波にかかわっている点で、違いが見分け難く思われます上に、「続く潮路を」と言ったのが、あまり聞きよい言い様ではないように思う。

左の歌は、「なだ船」というのが、これも優美な感じではないけれども、「ながめこし天つ雲居は」などと詠んだ心が、結構に見受けられますので、左の勝と判定しました。

【注】○あまつくもる 天つ雲居。空の雲のある所。空。『西宮左大臣集』の「それにもや人は知るらむよとにもあまつくもるをながめくらせば」（四二）あたりが古い用例か。○なだぶね 灘船。撰津の国の灘の付近を巡航した船。「灘」は、今の兵庫県南東部、西宮市の武庫川河口のあたりから神戸市の旧生田川あたりにかけての海沿いの地域。○ものを 詠嘆を表わす終助詞。○あまたみえ侍るうたとも この語句の後への続き方はやや明らかでないようであるが、この語句は、次の「雲と波にまつはれて」を間にはさんで、後の「思ひわきがたく」にかかると見たい。すると、（右の歌は）多く見られます歌と……違い

が見分け難く、といった意味に解される。

【考察】左の歌は、これまで「ながめこし天つ雲居」は、今見ると「灘船のこぎゆく先」にあった、と詠んだ作と思われる。山で囲まれた京都でながめていた空が、今、船の行く手にあることに気づいたという作意であろう。

右の歌は、「白雲に続く潮路」を眺めると、雲の波と潮路の波が見分げがつかないとの心であろう。ただ、こういう着想の歌は、これまでも多く見られたものである。

俊成の判詞は、左右いづれも「よろしき歌」と見ると一応評価している。しかしその上で、右歌については、雲と波に関する同様の歌が多いことを言い、また「続く潮路」という表現が「聞きよくしもあらぬ」と批判する。散文的で声調の美しさにも欠ける言い様と見たものであろうか。

対する左歌については、「灘船」の語がやはり優美ではないけれども、「ながめこし天つ雲居」などと詠んだ心が「よろしく」見えると評価し、左の勝と判定している。

二十六番 左持

懐能

109 ながのうみのしほちはるかにながむればくもたちまじるおきつしらなみ

右

憲経

110 あまをぶねちさとのなみにこぎちれどつりのこころやひとつなるらん

左、さきざきのおなじ心に侍るにとりて、すゑのく、くもるにまがふおきつしらなみといへる詞花集のうたに、たちまじるばかりやかはれらん。

右は、めづらしきさまには侍るを、つりの心、眺望にはえうなくや侍らん。又なみを千里とも万里ともいふは、つねの事なれど、うみのおもてを千里とよまん事は、すこし先達ゆるさざるやうに

ぞおぼえ侍れど、おもきなんにはあらず。ただし歌のほど持なるべし。

【通釈】

二十六番 左持

懐能

<sup>109</sup> ながの海の、潮路をはるかに眺めると、雲と一つになった沖の白波が見える。

右

憲政

<sup>110</sup> 漁師の小舟が、千里の波路に散らばっているが、釣りをする心は一つだろうかと思う。

左の歌は、前にあった歌と同様の着想ですが、それにつけて言えば、下の句は、「雲居にまがふ沖つ白波」と詠んだ『詞花集』の歌に比べると、「たちまじる」と言ったところだけが異なるに過ぎないであろう。

右の歌は、目新しい詠み様ではありますが、釣りをする心は、眺望の歌には不要なものだろうかと思えます。また波について千里とも万里とも言うのは、普通のことだけれども、海面を千里と詠むようなことは、いささか歌道の先輩の認めないことのように思われますが、重大な欠点ではあるまい。ただし（左右の歌を比べると）歌の程度は持というところであろう。

【注】○なごのうみ 六番の「注」参照。○くもたちまじる 「たち」は強調の接頭語。後の「波」の縁語になる。○くもゐにまがふおきつしらなみ 『詞花集』（三八二）に見える藤原忠通の歌の下旬。上句は「わたのはらこぎいでて見ればひさかたの」。一首はもと保延元年四月

『内裏歌合』に「海上遠望」の題で詠まれた作。

【考察】左の歌は、ながの海のはるかな沖に雲と波とが一つに見えた様子を詠んでいる。ただ俊成が判詞で触れているように、着想は二十五番右歌などと同様であり、下旬は、

わたのはらこぎいでて見ればひさかたの雲居にまがふ沖つ白波（『詞花集』三八二、藤原忠通）

『広田社歌合』注釈（二）

の下旬と類似している。

右の歌は、漁舟が「千里の波」に散らばっているが釣りをする心は「一つ」かと思つと詠む。「千里」に対して「一つ」と言うのを表現上の特色に仕立てた作と思われるが、俊成の指摘するように、「海上眺望」の歌に「釣りの心」を詠むのは適当でないであろう。

俊成の判詞は、このような左右の歌の問題点を挙げたほか、なお右歌については、「海のおもてを千里と」詠んだ点を問題視している。これは陸地でなく海面に千里の語を用いて詠むのを不適当と見たものか、それとも距離でなく海面の広がりを表わすのに千里の語を用いるのを不適当と考えて言ったものか、いずれであろう。この点は後者の方が理に合った見方のようにも思われるけれど、「千里」の語が遠い距離を意味するだけでなくて、千里四方の意味でも用いられることは、広く知られていたはずである。例えば『和漢朗詠集』の

秦甸しんてん之一千余里、凜凜りんりん氷鋪しんけり（二四〇）

の詩句は有名で、俊成もこの詩句によつた歌を『長秋詠藻』（二四五）に残している。それで後者の見方は採り難いと思う。やはり（千里四方の意でも）「千里」の語を海面に用いることを、和歌の先例が乏しいと見て、俊成は問題にしたのであろう。

二十七番 左

智経

III おきつすにしほやみつらんあさりするあしまのたづのたちさわぐめ

右勝

経尹

<sup>112</sup> わたのはらすまのなみちをみわたせばうらづたひして月月もやれるもやどとる  
このつがひの左右ともにめづらしくはみえ侍るを、二首のすゑのことばに、左はさわぐめるとおき、右はやどとるといへる、ともにみまとまる心ちぞし侍れど、なほ右のすまのなみちをみわたせばといへるすがた、いうにきこゆ。よりて右のかちと申すべし。

【通釈】

二十七番 左

III 沖の州に、潮が満ちてきているのだろうか、餌を求め<sup>えを</sup>る葦<sup>あし</sup>の間の鶴<sup>つる</sup>が、騒いでいるようだ。

右勝

経 尹

II 海原遠く、須磨のあたりの波路を見渡すと、浦から浦へと移つてきて、月が、宿っていた。

この組み合わせの左右の歌は、ともに目新しいものとは見えませんが、二首の末の言葉に、左は「立ちさわぐめ」と言い、右は「宿とる」と言っているのが、いずれも耳障りに聞えるように思いますが、やはり右の「須磨の波路を見渡せば」と詠んだ歌の姿は、優美に思われる。そのため右の勝と判定しましょう。

【注】○おきつす 沖にある州。「州」は土砂がたまって水面上に現れた所。「沖つ州」の用例は『万葉集』(二七九・三三六)に見える。○あさりする 餌を探し求める。「あさりする鶴」の用例は『万葉集』(二六五)に見える。○すま 十一番の「注」参照。○うらづたひ 浦伝ひ。浦から浦へと移動すること。『源氏物語』須磨の巻に「浦づたひに遣<sup>やう</sup>つつ来るに、ほかよりもおもしろきわたりなれば心とまるに」とある。また明石の巻に源氏の歌として「はるかにも思ひやるかな知らざりし浦よりをちに浦づたひして」の一首が見える。これは須磨の浦からなお遠い明石の浦に移ったことを言ったもので、明石の巻の異名「浦づたひ」もこれに由来する。○みまとまる 耳留まる。ここでは耳障りに聞こえる意。

【考察】左の歌は、「あさりする葦間のたづ」が騒ぐと見えることから、「沖つ州に潮や満つらん」と推量した作である。これは、その情景や用語の上で、『万葉集』の、

若の浦に潮満ちくれば濁をなみ葦<sup>あし</sup>辺をさしてたづ鳴き渡る (九二四、山部赤人)

夕なぎにあさりするたづ潮満てば沖波高みおのが妻呼ぶ (二六五) などの歌に通うところがあり、万葉風の詠み様に特色が見られると思

う。

右の歌は、「須磨の波路」を見渡すと、「浦伝ひして月も宿とる」と詠む。この下句は、月を擬人的に扱ひ、月が「浦伝ひ」をしてきて須磨の浦のあたりに宿をとったと見立てたものであろう。この「浦伝ひ」の語は、『源氏物語』の須磨・明石の巻に、「注」で触れたように用いられているので、右歌にはその影響があるかと思う。

俊成の判詞は、左右ともに「めづらしく」は見えると評するが、二首の末尾の表現を問題視し、左の「さわぐめ」、右の「やどとる」と詠んだのが「耳とまる心ち」がすると言っている。これらの言葉は、例えば「さわぐなり」とか「やどれる」とかの言葉に比べても知られるように、声調上適切なものとは思われないので、その点を俊成は指摘したのであろう。「やどとる」は、群書類従本では「やどれる」となっているが、それが本来の形ならば、俊成は問題視しなかつたであろうと思う。その上で俊成は、右歌の「須磨の波路を見渡せば」と詠んだ姿を「優にきこゆ」と評価し、右の勝としている。

二十八番 左持

姓 阿

III ひろたよりあかしをかけてながむればゑじまがいそにさわぐしらな

み

浄 縁

III あれやこのあまのすむてふうらならんたくものけぶりそらにしろし

左、このころことばをかしくは侍るを、ひろたよりとおかれたるはじめのく、あまりたしかなる心ちやすらん。すゑのゑじまがいそにさわぐしらなみも、などさはとぞきこゆる。

右歌、しものくの、たくものけぶりそらにしろしといへるは、ふるきすがたに侍るを、かみのくに、あれやこのとおけるや、おなじうたのすがたともおぼえ侍らざらん。ふかきなんにはあらねど、たがひにかやうの事のみえ侍れば、持と申すべきにや。

【通釈】

二十八番 左持

姓 阿

<sup>113</sup> 広田から、明石の方まで眺めると、(淡路の) 絵島の磯に白波が騒いでいる。

右

浄縁

<sup>114</sup> あれこそは、漁師の住むという浦だろうか、——藻塩を焼く煙が、空に目立って見える。

左の歌は、一応心も言葉も面白いのですけれど、「広田より」と詠まれた最初の句は、あまりに明確に言い過ぎた感じがするでしょうか。また下の句の「絵島が磯にさわぐ白波」も、どうしてそんな風に詠んだものかと思われるのです。

右の歌は、下の句に「たく藻のけぶり空にしるしも」と詠んだのは、古風な詠み様ですが、それに対して上の句に「あれやこの」と詠んだのは、(新しい詠み様で) 同じ歌の姿とは思われないうえ、重大な欠点ではないけれども、左右の歌はそれぞれこういう問題点が見られますので、持とすべきでしょうか。

【注】○あかし 明石。播磨の国の歌枕。今の兵庫県明石市のあたり。  
○系じま 絵島。五番の「注」参照。○あれやこの あれは、まさしく(……であろう)。「や」は疑問を表わす係助詞だが、強調・詠嘆の心も示す言い方と見てよいか。近称の代名詞「これ」を用いた「これやこの」の用例は、『万葉集』(三五・三六三)以来少なくとも、遠称の代名詞「あれ」を用いた「あれやこの」の用例は珍しく、平安時代末期に生まれた言い方かと思われる。この浄縁の歌以外の用例に、『小侍従集』の「今朝みれば小野山かすむあれやこのせれうのさとにたつる蚊遣火」(四四)がある。○たくものけぶり 藻塩を焼く煙。二十四番の「注」参照。

【考察】左の歌は、広田から明石にかけて海上を眺めた折に目を引いたものとして、「絵島が磯にさわぐ白波」をとり上げている。ただ実際は、広田から明石は見えない位置にあり、絵島は淡路の岸沿いの小島

で、近づかない限り磯に騒ぐ白波を見得るとは思われぬ。風景を見ずに想像して詠んだものであろう。

右の歌は、「あれやこの」という初句が目新しいが、藻塩を焼く煙が空に目立つことから、あそこが「あまの住むてふ浦ならん」と推量している。これは『古今集』の、

わたつみのわが身こす波たちかへりあまの住むてふうら見つるかな(八一六、よみ人しらず)

によって詠んだものであろう。

俊成の判詞は、左の歌については、「心言葉をかしく」は見えるとしながらも、初句と下句とに問題があると指摘している。初句「広田より」は「あまりたしかなる心地」がすると言う。これはこの歌で、「広田より」と眺める場所を示すのは、あまり意味をもたない点を指摘したのであろう。下句「絵島の磯にさわぐ白波」も「なごさは」と否定的な見方をとっている。否定する理由は記されていないが、絵島の磯にさわぐ白波は、ある程度近づかないと見られないから、広田から海上を遠望する歌として不適当と考えられたのではなからうか。

右の歌については、下の句の古風な表現と上の句の新しい表現との違和感がある点を指摘している。下の句の中でも「しるしも」という言い方は、『日本書紀』(卷十三、允恭天皇八年二月)に、衣通郎姫の歌として記す。

わがせこが来べきよひなりささがねのくものおこなひこよひしるしも

や、『万葉集』(三七〇)の歌などに用いられており、古風な表現と見られたであろう。それに対して、初句の「あれやこの」という言い方は、「注」で触れたように、この当時に新しく用いられるようになったと思われる。そういう上の句の新しい言い様と、下の句の古風な表現とが、一首全体の「姿」として調和していない点を、俊成は問題視しているのであろう。左右とも「深き難」ではないにせよ、こういう問題をもつので持としている。

二十九番 左

中納言

115 むこのうらのおきのうけふねちかづけばともさそふなりあごのよび  
ごゑ

右勝

素 覚

116 むこがさきうらよりをちにこぎゆけばきしかたははやかすみけらし  
な

左歌、こころをかしくは侍るを、眺望テウバウのころやすくなくて、あ  
まのともさそふことばやすすみて侍らん。

右歌は、すゑのけらしなぞ、いかにぞきこえ侍れど、うらよりを  
ちなどにへるわたり、よろしくや侍らん。よりにて右のかちと申  
し侍るべし。

【通釈】

二十九番 左

中納言

115 武庫むくらの浦うらの、沖むらの（網あじの目印めいんの）浮う子船こぶねが浜はまに近づくと、仲間ななを呼  
ぶらしい、網あじ引きたちの呼び声よびこゑが響ひびく。

右勝

素 覚

116 武庫むくらが崎さきを離れ、浦うらを経て遠とほくに船ふねをこぎ進めると、通とほつて来たあ  
たりは、もうかすんで見えるのだった。

左の歌は、その心は面白いとは思いますが、（題の）眺望テウバウの心があ  
まり見られず、漁師いしやの友ともを誘よび呼よび声こゑが前面まへに出でているところが  
あるでしょうか。

右の歌は、末尾の「けらしな」という言葉は、どうかと思われま  
すけれども、「浦うらよりをちに」と詠よんであるあたりは、結構だ  
ろうかと思えます。そのため、右の勝と判定しましょう。

【注】○むこのうら 二番の「むこのうみ」の「注」参照。○うけふ  
ね 浮う子船こぶね。水中みづなかの漁網いしなみの所在しざんを示す浮うきとして、網あじ綱なみに付ける船。

○あご 網あじ子こ。（地ち引き）網あじを引く人。○むこがさき 武庫むくらが崎さき。武庫  
の浦うらで海うみに向かい陸りくの突き出た部分。武庫川むくらがわ河口がわの港みなとで船ふねの出入り口

にあるそれであろう。○をち 遠方。○けらしな 「けらし」は、古く  
は、過去の動作や状態を推量する場合に用いられるのが一般であるが、  
平安末期ごろから、「けり」と同様の意味で、それを和らげて言うよう  
な用い方もされてくる。清輔の『和歌初学抄』の「由緒詞」の項に「け  
らし」を挙げて「ケリ也」と注するのは、これを示している。この右  
歌の「けらし」も、そういう用法のものと見られる。「な」は、感動を  
表わす終助詞。

【考察】左の歌は、武庫の浦で地引き網を引く様子をとり上げ、沖に  
あった網の目印の浮子船が浜に近づくと、網子たちの仲間を呼ぶ声が  
聞こえると詠む。ただこの歌は俊成が判詞に指摘するように、「海上眺  
望」という題詠として見ると眺望の心が少ない。

右の歌は、武庫の港から船出して遠くこぎ進み、顧みると、通つて  
きた辺りは、「はやかすみけらしな」と詠んでいる。

俊成の判詞は、左歌については、「心をかしく」と評する一方、前記  
のように題の眺望の心が少ない点を指摘している。

右歌については、歌の末尾の「けらしな」という言い方を疑問視し  
ている。これは音調上の問題とも考えられるが、『古今集』の忠岑の歌  
（九二八）などに用例のある言い方である。むしろ「注」に触れたよう  
に当時の新しい用法による言い方なので、俊成は言葉の伝統的な用法  
を重んじる立場から指摘したものかと思う。しかし右歌の「浦よりを  
ちに」あたりの表現を「よろしく」と評価し、右の勝としている。

述懐

一番 左

按察使公通卿

117 いくとせに春にしられでなりぬらんおいきに花はいつかさくべき

右勝

大 式

118 うきながらいとひははてじのちのよもこれにまさらんものならなく  
に

左右のうた、いづれもさる事ときこえて、とりどりにをかしくみ

え侍り。ただし左歌、いくとせにとおきて、すゑにいつかさくべきと侍るや、いづれの字おなじころに侍らん。もししからば、右歌させるなんなし、かつと申すべきにや。

【通釈】

述懐

一番 左

按察使公通脚

117 わたしは春に見捨てられて、もう何年になったであろう、——老木のような自分に、花はいつ咲く時があるうか。

右勝

大 弐

118 つらいと思いがらも、この世をいとい果てるまでの気持ちはない、——来世も、この世に勝るとは決まっていけないので。

左右の歌は、いずれももっともなことと思われて、それぞれ特色があり、面白く見えます。ただし左の歌は、初めに「幾とせに」と言つて、末尾に「いつか咲くべき」と言っていますのは、不定称の言葉という点で同じ内容の語が重なっているだろうかと思えます。もしそうであれば、右の歌の方はこれという欠点はないので、勝ると言うべきかと思えます。

【注】○春にしられで 春に見捨てられて。官位に恵まれない身の状態の比喩として言う。○いとひははてじ この世をいとい果てる（世を捨て出家することまでは、するまい。○のちのよ 死後の世。来世。この言葉は、『万葉集』の歌などでは、後にくる時代、後代の意味に用いられているが、平安時代中期以後の歌では、仏教思想の影響で、現世に対する後世ごせ、死後に生まれ変わる世を言うのが一般である。○ならなくに 「なら」は断定の助動詞。「なく」は、打消の助動詞「ず」のク語法。「に」は詠嘆の用法の助詞。○さる事 もっともなこと。○いづれの字 「いくとせ」「いつ」という不定称の語。

【考察】左の歌は、官位に恵まれぬ状態で老い朽ちることかと思嘆きを、「春にしられで」幾年になったことか、「老い木に花はいつか咲くべき」と、花咲く時もない老木に託して詠んでいる。ただ、こうい

う例えは特に目新しいものでなく、その下句は、

一とせに春は二たび立ちぬれど老い木の花はいかがさくべき（『永久百首』四一六、源顕仲）

の下句によく似ている。

右の歌は、現世はつらいが「いとひは果てじ」と思う、それは「後の世」も現世に勝るとは限らないので、と詠んだものであろう。仏教思想による「後の世」は、期待をもって受けとられることが多いが、右歌はそれと異なる、さめた見方をとっている。

俊成の判詞は、左右の歌はいずれも「さる事」と思われ、「とりどりにをかしく」見えると評価する。ただその上で、左歌が「いくとせ」「いつ」と不定称の言葉を重ねて用いた点を問題視している。これは歌病として避けるべきものは同心病（同義の語の重複する病）のみと後年『古来風体抄』に記すのと同じ観点と見られる。それに対して右の歌は特に問題点がないという理由で、右の勝としている。

二番 左

前大納言実定脚

119 さりとともまつをたのみて月日のみすぎのはやくもおいぬべきかな

右勝

頼 政

120 おもへただ神にもあらぬえびすだにしるなるものをのあはれは左歌、まつをたのみてなどいへるすがた、いとをかし侍り。まつ、すぎなど侍るや、これかれにかりたるやうに侍らん。

右歌はことかはり、あらぬすがたのことばづかひなど、いとをかしくこそきこえ侍れ。これは閭巷リョウカウの野曲ノキョクのなかに、えびすだにものあはれしるなりとうたふ歌の侍るなるべし。かれをひきて、神にもあらぬえびすだにといへるうたのすがた、いとをかしきこえ侍るなり。ただし、ことすこし俗にちかくや侍らん。されど神の御なもかかりて侍れば、以て右かつと申し侍るべし。

【通釈】

二番 左

前大納言実定脚

119 不遇の身でも、もしかしたらと、待つのを支えにしてきたが、月日が過ぎるばかりで、もう私は老いてしまいです。

右勝

頼政

120 思いやってください、——神ではないえびすさえ、ものあわれは知っているとことです。

左の歌は、「待つをたのみて」などと詠んだ姿が、大層面白いと思えます。(ただし)「待つ」に「松」を掛け、「過ぎ」に「杉」を掛けなどして言っていますのは、それらの言葉に寄り掛かって詠んでいるように見えるかと思えます。

右の歌は、それと様子が異なり、変わった姿の歌の言葉遣いなどが、大層面白いと思われます。これは民間の歌謡の中に、「えびすだにもものあはれ知るなり」と歌う歌があるのでしよう。その歌詞を引用して、「神にもあらぬえびすだに」と詠んだ歌の姿が、大層面白く思われるのです。ただし、言葉が少々俗に近いでしょうか。しかし(えびす神という)神の御名も関係してはいますから、右の歌を勝ると判定しましょう。

【注】○さりともし望ましくない現状を承認した上で、望ましい状態の実現を期待する気持ちを示す言葉。今まではそうであっても(今後よい折もあるであろう)。○まつをたのみて 待つことを心の支えにして。「まつ」は「待つ」意だが、同音の「松」をおわせる。○すぎのはいやくも 過ぎることが早く、早くも。「はいやくも」は、過ぎることが早い意であるが、また後に続き、早くも「老いぬべきかな」の意であろう。なお「すぎ」は「過ぎ」の意だが、同音の「杉」をおわせ、前の「松」に応じた縁語とする。○思へただ「ただ思へ」を倒置して強調した形。「ただ」は強意の用法。○神にもあらぬえびす 「えびすの神」の存在を前提にして、その神ではない「えびす」と言ったもの。「えびすの神」の名は、後の二十四番右歌にも見えるが、蛭子の神とも事代主神とも言われる。広田神社の撰社、西宮の夷社の祭神。それに対して、神でない「えびす」は、東国の人、特に武人を、都の人から

見て、情趣や情味を解しない者という意識をもって言った語。なお、この二種の「えびす」を詠み入れた慈円の歌に、「西のうみに風心せよ西の宮あづまにのみやえびすさぶらふ」(『拾玉集』二八七六)がある。○ものあはれ 物事に触れて引き起こされるしみじみとした情緒、といった原義から、こはやや転じて、人の心を同情をもって理解する心とか、情味とかを言ったのであろう。○あらぬすがた 普通と違った姿。○閭巷 民間。○郢曲 平安・鎌倉時代の謡いものの総称。風俗歌、朗詠、今様など。○えびすだにものあはれ知るなり 今様の歌詞であろうか。確認できる資料はないが、『拾玉集』にも「えびすこそものあはれは知ると聞けいざみちのくのおくへ行かなん」(二七七)と詠まれているから、知られていた歌詞であったかと推測される。

【考察】左の歌は、今まで不遇の身ながらなお機会を待つことを頼みにしてきたが、歳月が過ぎ、老いてしまいうたと嘆く心で作で、「待つ」に「松」、「過ぎ」に「杉」を掛け、縁語仕立てで詠んでいる。ちなみに作者実定は、永万元年(一一六五)二十七歳で権大納言を辞任、以後十二年間の不遇時代を経て、安元三年(一一七七)大納言また左大将にもなるが、その不遇時代の心を反映する一首である。

右の歌は、「思へただ」と呼びかけて、「神にもあらぬえびす」さえ「ものあはれ」は知るといふ、と詠んでいる。この場合「思へただ」と呼びかけた相手は、広田神社の撰社に祭る「えびすの神」で、その神でない東国の荒々しい「えびす」さえ「ものあはれ」は知るといふから、「えびすの神」にはそのことを思われて、かく祈る自分に情けをかけてくださいと願ったものであろう。歌の初句に「思へただ」という呼びかけを置く先例は、『赤染衛門集』(三三七)などにも見られ、特に目新しいものではないが、その呼びかけている事柄は、この頼政の右歌の場合、今様の歌詞あたりから借りたところがあるにしても、和歌として特色が認められると思う。

俊成の判詞は、左歌については、「待つをたのみて」などと詠んだ姿を「いとをかし」と評する一方、「松」「杉」などを詠み入れた技巧

を批判している。そういう技巧は歌の中心になる心と結びつかないためであろう。

右歌については、歌の姿の特色を認め、民間の歌謡の歌詞を用いて「神にもあらぬえびすだに」と詠んだ姿を、「いとをかし」と評する。ただ、この表現は「すこし俗に近く」も思われるが、えびすの神の名も詠まれているとして、右の勝と判定している。

三番 左侍

小侍従

121 きみがよにあふせうれしきいはしみづすむにかひあるながれともがな

右

権大納言実房卿

122 とにかくにあはれむかしにあらませばとおもふ事のみかずつもりつ

左、きみがよにあふせうれしきいはしみづとよまれたり。かたがたにいかでかうたにまけ侍らん。

右、こころこもりて、なにとなくあはれにもきこえ侍るものかな。ただし、左歌勝負はばかりあり。持などにや侍らん。

【通釈】

三番 左侍

小侍従

121 君の御治世に会う折を得て、うれしいことです、——石清水が澄んだ流れとなるように、住むかいのある世の伝統となつてほしいものです。

右

権大納言実房卿

122 あれこれと、ああ昔であつたならと思うことばかりが、ふえてゆくのです。

左の歌は、「君が代にあふせうれしき石清水」と詠まれている。「君が代」といい、「石清水」といい、いずれにせよ歌として負けることのない作でしょう。

右の歌は、心がこもっていて、何となくしみじみと感動させられ

『広田社歌合』注釈(二)

る一首です。ただ、左の歌を勝負の対象とすることは憚られます。持というところでしょうか。

【注】○きみがよ 天皇の御治世。○あふせ 会う機会。○いはしみづ 岩間からわき出る清水を意味する語であるが、石清水八幡宮も意識されているのであろう。この石清水の社は、今の京都府八幡市男山にあり、皇室を含めて広く人々から信仰された。山城の国の歌枕でもある。○すむにかひあるながれ 住むかいのある治世の伝統。「住む」に同音の「澄む」を響かせ、「流れ」とともに「いはしみづ」の縁語とする。○ともがな 格助詞「と」に終助詞「もがな」が付いた形で、願望を表わす。○とにかくに あれこれと。○かたがたに (天皇の治世を祝う歌でもあり、石清水の神を詠み入れてもいて、) いずれの点から見ても。

【考察】左の歌は、天皇の治世に会うことができたの喜び、この治世の伝統が続くことを願う心を、「石清水」の名を織りこみ、縁語を用いて詠んでいる。ちなみに作者の小侍従は、石清水八幡宮別当紀光清の女である。

右の歌は、具体的なことは分からないが、昔であればと感ずることだけが、あれこれとふえてゆくと嘆く心を、端的に詠んでいる。

俊成の判詞は、この右歌を、「心こもりて何となくあはれに」思われると評価する。ただ左歌は天皇の治世を祝い、石清水の神にもかわる作なので、負けにはできないことから、持と判定している。これは歌合独特の評価基準を用いたものである。

四番 左勝

新大納言実国卿

123 あまくだる神のめぐみのしるしあらばほしのくらゐもなほのぼりな

右

師光

124 ゆくすゑにかからん身ともしらずしてわがたらちねのおほしたてけ

左、あまくだるとおき、ほしのくらゐもなど侍る風情、いとをかしくも侍るかな。

右、ことばのはなをかざらず、ことのはにまかせてなほくいひくだされて侍れど、げにさる事ときこえて、あいなくよそのたもとまでしをるる心ちなんし侍る。ただし、両首の意趣懸隔なるうへに、左すがたなほをか。よりて為<sub>レ</sub>勝。

【通釈】

四番 左勝

新大納言実国卿

<sup>123</sup>天下られた神、その恵みの御利益があれば、星の位（雲の上人<sub>うへ</sub>の地位）も、さらに上がるに違いありません。

右

師 光

<sup>124</sup>行く末に、（私が）こころいう身になるとも知らないで、親は私を育てあげられたことでしょう。

左の歌は、「天下る」と言った上で、「星の位も」などと言っていまず趣向が、まことに面白く思われます。

右の歌は、言葉を美しく飾ることをせず、言葉に任せてまっすぐに詠み下されていますが、実にもっともなごと思われて、ついに他人の私のもともたまで何となく涙でぬれる思いがします。ただし、この二首は趣意が全く違う作で（その点から）比較できませんし、左の歌の姿はやはり面白い特長があります。そのため左の歌を勝とします。

【注】○あまくだる 天上界から地上に下る。○しるし 神仏の御利益、靈験を、ここでは言う。○ほしのくらゐ 星の位。雲の上人として宮中に列する地位を、星に例えた言葉。大臣以下、公卿、殿上人を言う。

【考察】左の歌は、「天下る神」の御利益がいただけるならば、「星の位」もなお「のほりなん」と詠む。雲の上人としての昇進について神を頼る心を詠んだものだが、「天下る」に対して「星の位」も「のほりなん」と縁語を並べた趣向が際立って見える作である。ちなみに作者

の藤原実国は、この年の三月に従二位に叙せられていた。そして三年後の承安五年には正二位に昇ることになる。

右の歌は、自分が将来こんな身になるとも知らず、親は自分を育ててくれたことであろうと詠む。身をかえりみ、親をしのんでの感慨を端的に詠んでいる。内容や用語の上で、遍昭の歌、

「たらちめはかかれともしもむばたまのわが黒髪をなでずやありけん（『後撰集』一二四〇）」

が連想されるが、右歌はより率直な詠み様かと思う。ちなみに作者の源師光は、大納言師頼の子であるが、藤原頼長の猶子となり、そのためか官位は正五位下、右京権大夫・侍従で終わっており、この歌合の当時は入道していたようである。そういう身の上を「かからん身」と言ったのであろう。

俊成の判詞は、左歌で「天下る」に対して「星の位もなほのほりなん」と言った表現上の趣向を、「いとをかしく」と評価している。

右歌については、言葉を飾らず詠んでいるが、その心は「げにさる事」と思われて同情せざるを得ないと評価する。ただ左右の歌の趣意は全く違うのでその点で比較できないことを言い、左歌の表現上の趣向を「なほをかし」として左の勝と判定している。

なお後に、右歌を定家が『新勅撰集』に採り、左歌を為世が『新後撰集』に採ったのは、それぞれの特徴から見て興味深いように思う。

【備考】四番左歌は『新後撰集』（七四三）に（第四句「星の位に」の形で）収められている。また四番右歌は『新勅撰集』（二一三九）に収められている。

五番 左持

左京大夫入道観蓮教長

<sup>125</sup>このよにはかずならずともこのしなわくるはちすのみとはなりなん

右

左大弁実綱卿

<sup>126</sup>くらゐやまのほればくだるわが身かなながみがはこぐふねならなく

に

左は、蓮台之宿縁うたがひなく、右は、棘路之昇進たのみおほし。現当雖異、後憑已同。仍為持。

【通釈】

五番

左持

左京大夫入道観蓮教長

<sup>125</sup> 現世ではとるに足りないこの身でも、(来世は) ぜひ九品浄土の蓮華に座する身となろうと願うのです。

右

左大弁実綱卿

<sup>126</sup> 地位は上りもし下りもする、そのことを実感する我が身です、—— 最上川を(上り下りして) こぐ船ではないのだが。

左の歌の作者は、やがて浄土の蓮華の座につく運命をもつこと疑いないと思われ、右の歌の作者は、いずれ大納言に昇進すること十分に期待できると思う。目指すところに現世と来世の違いはあっても、将来に希望をかける点は同様である。そこで持とする。

【注】○ここのしなわるはちすのみ 九品浄土の蓮華の上に座する身。人が生前に積んだ功德に応じて往生が九段階に分かれ、それに依じて浄土の蓮の花の座も分かれるという。「はちす」はハスの古名。○くらゐやま 位山。飛驒の国の歌枕とされる山であるが、位階の比喩に用いられる。○もがみがはこぐふね 「最上川」は、出羽の国の歌枕とされる川で、今の山形県を流れる。そこをこぐ船は「古今集」に「最上川のほればくだる稲船のいなにはあらずこの月ばかり」(二〇九二)の歌があることから、右歌の第二句「のほればくだる」に対応させたもの。○蓮台 浄土に往生した者の座する蓮華の台座。○宿縁 前世からの因縁。○棘路 ここでは大納言の異称。○現当 現世と当来(来世)。○後憑已同 後ノ憑、已ニ同ジ。将来に希望をかけることは全く同じである。

【考察】左の歌は、現世では数ならぬ自分も来世は九品浄土の蓮華に座する身になりたいという思いを詠む。作者の観蓮(藤原教長)は、大納言忠教の子で、崇徳天皇に近侍して参議になったが、保元の乱で

『広田社歌合』注釈(二)

出家、配流されている。その後許されて帰洛、この『広田社歌合』のころには東山の寓居で歌合を催したりしている。

右の歌で、「位山のほればくだる我が身かな」と言ったのは、位階の昇進が順調でない自分を顧みての感慨であろう。昇進が順調でない人に抜かれて相対的に地位が下ることにもなる。しかしそういう身上を詠嘆するだけの歌ではなく、『古今集』東歌の一首

最上川のほればくだる稲船のいなにはあらずこの月ばかり(二〇九二)

をとり入れて、「最上川こぐ船」ではないのだが言い添え、自己を客観視した余裕を示している。作者の藤原実綱は内大臣公教の子で、叙爵は弟の実国、実房らより早く保延四年(一一三八)であったが、その後昇進がはかどらず、公卿に列するのは弟たちに遅れをとり、仁安二年(一一六七)に参議正四位下に叙せられている。(嘉応二年(一一七〇)の『住吉社歌合』述懐七番にも、このことに関する実綱の歌が見える。)この歌合の当時は実綱は参議従三位左大弁で、なお弟たちより下位であった。

左の歌は来世の浄土往生を願い、右の歌は現世の自己の位階に関する感想を詠んでいるが、俊成は左右それぞれ心に共感しているようで、技術面の批評を加えず、各作者の前途に対する声援めいた言葉のみを記している。

六番

左勝

三河内侍

<sup>127</sup> おしなべてこころひろたの神ならばかかるうき身をめぐまざらめや

右

宰相中将実守卿

<sup>128</sup> けふむすぶちぎりはつひにゆめさめんのちのよまでもたのもしきかな

左歌、こころひろたの神ならばといへる、まことにうき身のため

もたのもしくおぼえ侍り。

右歌、けふのやまとことのはのちぎりは、長夜のゆめさめんよま

でのたのみとならん事、まことにしかあるべき事なり。ただし、左なほ当社をかけたてまつれり。よりてかつと申すべし。

【通釈】

六番 左勝

三河内侍

<sup>127</sup>すべて一様に、広い心で情けをかけられる広田の神ならば、こういうつらい私の身を、きつとあわれんでくださるでしょう。

右

宰相中将実守卿

<sup>128</sup>今日このようにして（神と）結ぶ御縁は、最後に迷いの夢から覚める来世までも、頼もしいことに思われます。

左の歌は、「心ひろたの神ならば」と詠んでいるが、これは本当につらいことの多い人間の身にとつて頼もしく思われます。

右の歌で、今日の和歌による結縁は、長い迷いの境地を脱する来世までの頼りになることを詠んでいるが、これはまことにもっともなことである。ただし、左の歌はやはりこの広田の社の御名を取り入れて詠んでいる作です。そのため（左が）勝つと判定しましょう。

【注】○おしなべて 皆等しく。○こころひろたの神 「心広き」に

「広田」を掛ける。○めぐまざらめや 情けをかけないことがあるうか。

○ゆめさめんのちのよ 人が現世での迷いの夢から覚める来世。○やまことこののはのちぎり 和歌を詠むことによる結縁。○長夜 人が悟りを開くことができず、無知の状態に長くどまっているのを、長い夜に例えて言う仏語。

【考察】左の歌は、「心広田」と掛詞にして、心も広く恵みを与えられる広田の神ならば、自分のような憂き身をあわれんでくださるであろうと、広田の神に頼る思いを詠む。

右の歌は、広田の社に奉納する歌合に詠進することを、神と「結ぶちぎり」としてとり上げ、この結縁は「夢さめん後の世までも」頼もしく思われると詠む。神仏を一体視するのは、当時では普通の見方である。

俊成の判詞は、左右それぞれの心に共感することを記した上で、左が広田の神の名を詠み入れている点から勝としている。

七番

左侍

俊 恵

<sup>129</sup>なにしおはばにしてふ神をたのみおかんそなたをつひにねがふ身なれば

右

俊 成

<sup>130</sup>ちはやぶる神にたむくることのははこむよのみのしるべともなれ左歌、にしてふ神をたのみおかんといへる、すがたをかしく、こころあはれにこそおほえ侍れ。

右歌は、身しづみ、よはひくれぬるものの述懐のだいにあふ事は、うれへをのべむねをやすむべきたよりには侍れど、身のうれへの事、いまはなかなかにまかりなりて、申すにもおよばず侍れば、ただけふのことのはのたむけによりて、かへして当来世世の転法輪の縁とせんとばかりをおもうたまへ侍るを、左はすがたいとをかしく侍れど、こころざしおなじずなるさまにみえ侍るにつきて、持をやこふべく侍らんとぞおもうたまへ侍る。

【通釈】

七番

左侍

俊 恵

<sup>129</sup>その名にふさわしいなら、西という名の（西の宮の）神を頼らせていただくう、——西方浄土（への往生）を結局願う身なので。

右

俊 成

<sup>130</sup>神にささげるこのたびの和歌は、後の世に仏の教えに近づく道しるべとなれと願うのです。

左の歌で、「西てふ神をたのみおかん」と詠んでいるのは、姿が面白く、心が胸をうつものに感じられます。

右の歌に関して言うと、（一般には）その身が世に埋もれ、年若いた者が、述懐の題にあつて歌を詠むことは、つらい思いを晴らし心を安らげうるよい機会なのですが、私の悲しみについては、今

はなまじ表現すると意を尽くさないものになりまして、言い表わすことができませんので、ただ今日和歌を神にささげることによって、これを一転して、後々の世に仏の教えに近づく機縁としようということだけを願っております。つきましては、左の歌は姿が大層面白いのですが、目指すところは右の私の歌と同じ方面のことのように見えますところから、持と判定させていただこうかと存じます。

【注】○なにしおはば その（実体を伴うものとしての）名をもつならば。○にしてふ神 西という名の神。西の宮の神を言う。この西の宮は、広田の社のことで、撰社である浜の南の宮（社頭雪二十二番参照）に対して、この名が用いられたようだ。大治三年に源顕仲が広田社の社頭で催した歌合は『西宮歌合』と呼ばれ、これに続いて撰社の南の宮で催した歌合が『南宮歌合』である。○ちはやぶる 神にかかると枕詞。○ことのは ここでは和歌を言う。○なかなかにまかりなりて「なかなか」は、中途半端でよくない状態と意識するところから、かえってそうでない方がよいという気持ちで用いられることが多い。ここでは前の文意を受けて、（自分の悲しみは）なまじ不十分な形で表現するよりも、言わないでおく方がよいものになっていて、の意である。「まかり」は、他の動詞の上に接頭語のように付いて、謙讓の意を添える用法のもの。○かへして当来世の転法輪の縁とせん 白居易の秀句として『和漢朗詠集』に収める「願<sup>カヘシテ</sup>以<sup>カヘシテ</sup>今生世俗文字業狂言綺語之誤、翻<sup>カヘシテ</sup>為<sup>カヘシテ</sup>当来世世讚仏乘之因転法輪之縁」（五八八）によつたもの。原典は『白氏文集』卷七十「香山寺白氏洛中集記」で、そこでは「誤」が「過」、「翻」が「転」、「当」が「将」の形で見える。「転法輪」は、仏の法（教え）を説くこと。これは輪を回して車を進めるように教えを進める意とも、この「輪」はインド古代の武器で、仏の教えが迷いを破って伝わることの例えに用いたとも言われる。

【考察】左の歌は、西方浄土への往生を願う身なので、「西てふ神」、西の宮の神を頼らせていただくこうと詠む。阿弥陀仏の住する浄土があ

るといふ西方に、西の宮を結びつけた趣向が主な特色であろう。後出の二十八番左の姓阿の歌、

なにしおへばたのみぞかくる西の宮そなたにわれをみちびくやとて

は、この俊恵の歌とよく似ている。

右の歌は、神にささげるこのたびの和歌が、後の世に仏の教えに近づく道しるべとなれと願う心を、率直に詠んでいる。左の歌とともに、神の本地を仏と見る立場での作である。

俊成の判詞は、左の歌が西方浄土を願う心に結びつけて「西てふ神をたのみおかん」と詠んだのをとり上げて、「姿をかしく、心あはれに」思われると評している。

俊成自作の右歌に関しては、これらの和歌を神にささげることが、後の世に仏法に近づく縁になるのを専ら願うてのしわざである旨を、『白氏文集』の句を用いて記している。俊成は、後の『古来風体抄』でも、和歌の仏教との関係をとり上げて、

これは浮言綺語のたはぶれには似たれども、ことの深き旨もあらはれ、これを縁として仏の道にも通はさむため

などと述べている。この『広田社歌合』の判詞では、和歌が「ことの深き旨もあらはれ」るものという認識にまで至っていたか否かは明らかでないが、和歌を仏教に近づけて考えようとする俊成の姿勢がうかがわれる。

#### 八番

左持

左兵衛督成範卿

131 ふたつなきのりのをしへをそむきつついくたびむつのみちにまどひぬ

右

盛方朝臣

132 あはれてふ人もなき身をうしとてもわれさへいかがいとひはつべき  
左、のりのをしへをそむきつつといへるすがた、いとをかしくこそ待めれ。

右歌、かやうのころなるうたはずこしききなれたるやうには侍れど、われさへいかがなどいへるすがた、これもいとあはれにきこえて、いづれともおもひわきがたく侍れば、なほ又持と申すべきにや。

【通釈】

八番 左持

左兵衛督成範卿

131 二つとない仏法（一乗の法）の、その教えに背き続けて、わたしは幾度、六道に迷うことを繰り返してきたことだろうか。

右

盛方朝臣

132 あわれと言う人もないわが身を、いとわしく思っても、わたし自身までどうしていといきる（出家する）ことができようか。

左の歌は、「のりの教へを背きつつ」と詠んだ姿が、大層面白いように思います。

右の歌は、このような心をもつ歌は少し聞き慣れたという気もしますが、「我さへいかが（いとひはつべき）」などと詠んだ姿が、これもまた大層心をうつものと思われて、左右いづれが勝るとも判断し難いところから、やはりこれも持と言うべきかと思えます。

【注】○ふたつなきのり 二つとない仏法。一乗の法を言うのである。『法華経』方便品に、「十方仏土中、唯有二乘法。無二亦無三。除二方便説、但説無上道」とある。「乗」は乗物を意味し、「一乘法」は、人を彼岸に導く第一の乗物に例えられる法で、それが「無二」とされることから「二つなき」と言ったと思われる。○むつのみち六道。衆生が罪業によって生死を繰り返す六つの世界。地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上を言う。○いとひはつ いといきる。ここでは出家することを意味するのであろう。

【考察】左の歌は、「二つなき」仏法に背いて、「六つの道」に迷うことを幾度重ねてきたわが身かと思う心を、「二つ」と「六つ」を対応させる技巧を用いて詠んでいる。これと似た詠み方をした先例には、二つなき法にあはずはかけはなれ五つの雲もはれずやあらまし（久

安百首』一一九〇、上西門院兵衛）がある。（『五つの雲』は、五障、女性がもつとされる五つの障害を言ったのであろう。）

右の歌は、あわれと言う人もないわが身をいとわしく思っても、自分までいとい果てて出家する気にはなれないという心を、飾らず詠んでいる。「あはれてふ」で始まる歌の先例は多いが、この右歌と同様の心の作は見いだしにくい。ただ、小野小町の、

あはれてふ言こそうたて世の中を思ひはなれぬほだしなりけれ（『古今集』九三九、『小町集』一〇八）

の一首は、これにヒントを得て右歌が詠まれたと見られるかもしれない。

俊成の判詞は、左歌の「のりの教へをぞむきつつ」と詠んだ姿を「いとをかし」と評し、対する右歌の「われさへいかが（いとひはつべき）」などと詠んだ姿を「いとあはれに」と評して、持と判定している。ただ俊成は、『千載集』には、右歌のみを採っている。これは、右歌が実感を率直に述べて「いとあはれに」思われる点を、より高く評価したのであろうか。

【備考】八番右歌は『千載集』（二〇八二）に収められている。

九番

左持

三位中将実家卿

133 むかしよりめぐみひろたの神ならばさりと秋のころしるらん

右

登蓮

134 いつまでとわがよのほどをたのみつつはかなくすぐす月日なるらん  
左、めぐみひろたのなどいへるころはあまたみえ待めるなかに、秋のころをよせられて待るは、いとをかしこそ待れ。宜

右、ことばに花をもとめ、文にたまをかざらざれども、ことばつづきもじすくなきこえてよろしくこそみえ侍れ。誠之至深者其詞無詞、文之偏質者其体少体といひて、これひとつのすが

たに侍るべし。

左は、さりととも秋のといへるころ、あはれにきこゆ。右は、はかなくすぐす月日なるらんとよめるすがた、叶<sup>ハ</sup>風体<sup>フウテ</sup>。よみて又為<sup>レ</sup>持。

【通釈】

九番 左持

三位中将実家卿

133 昔から、情けを広くかけてくださる広田の神ならば、ともかく私の「秋の心」、嘆きを御存じのことでしょう。

右

登蓮

134 一体いつまで、自分の人生の長さを頼りにして、はかなく過ごす月日が続くのであろうか。

左の歌は、「めぐみ広田の」などと詠んだ心は多くの歌に見えるようですが、その中で、「秋の心」を関連させて詠まれていますのは、大層面白いように思われます。これは「宜<sup>むべ</sup>ナルカヤ<sup>もツテ</sup> 将<sup>ノ</sup>愁字<sup>ノ</sup>作<sup>レル</sup>コト<sup>ト</sup>」と詠んだ詩の心によったのであろう。

右の歌は、言葉に華やかさを求めたり、文句を美しく飾ったりしていないけれども、言葉続きの上で用語を少なく絞っていると思われて、結構な作と見られます。「誠之至<sup>マコトニ</sup>深者<sup>シロコ</sup>、其詞無<sup>シ</sup>詞<sup>ト</sup>。文之偏<sup>ヒト</sup>質者<sup>シ</sup>其体少<sup>ク</sup>体<sup>ト</sup>。」と言われていて、これはこれで一つの独自の歌の姿と言えるでしょう。

左の歌は、「さりととも秋の（心しるらん）」と詠んだ心が、胸をうつものに感じられる。右の歌は、「はかなくすぐす月日なるらん」と詠んだ姿が、一つの風体と称するのにふさわしいと思う。そのため、これも持とする。

【注】○めぐみひろたの神 「恵み広き」に「広田の神」を掛ける。○秋のころ ここでは俊成が判詞に引く『和漢朗詠集』（二二四）の詩句により、「秋」と「心」を合わせた字形の「愁」を示す。○いつまでと いつまでのこととしての意で、後の「……はかなくすぐす月日なるらん」に続いているのであろう。○宜将<sup>ムベナルカヤ</sup>愁字<sup>モツテ</sup>作<sup>レル</sup>秋心<sup>コト</sup> 『和漢朗詠

集』（二二四）に収める小野篁の詩句で、前半に「物色自堪<sup>モノシロクニ</sup>レ傷<sup>ム</sup>」客意<sup>キヤクイ</sup>とあるのに続く後半。「愁」の字を「秋」の「心」として組み立てているのは、もつともなことだ、の意。○誠之至<sup>マコトニ</sup>深者<sup>シロコ</sup>其詞無<sup>シ</sup>詞<sup>ト</sup>、文之偏<sup>ヒト</sup>質者<sup>シ</sup>其体少<sup>ク</sup>体<sup>ト</sup> 出典未詳。きわめて深い誠は、それを表わずに足る言葉がなく、飾りを捨てきつた文言は、特色のある姿が見いだしにくい、といった意であらう。

【考察】左の歌は、情けを広くかけられる広田の神ならば、自分の嘆きを知ってくださるであらうとの心を詠む。上の句に「めぐみ広田の神ならば」と掛詞を用いて詠んでいるが、これは六番左の三河内侍の歌、

おしなべて心広田の神ならばかかるうき身をめぐまざらめや

と同様で、歌の心もよく似ている。下の句では『和漢朗詠集』（二二四）の小野篁の詩句により、「秋の心」で「愁」の意を表わすことを工夫している。この篁の詩句を和歌に詠み入れた先例には、藤原季通の歌、

ことごとかなしかりけりむべしこそ秋の心をうれへといひけれ

（『久安百首』四四八、『千載集』三五二）

があるが、左歌はそれに比べてさりげない詠み入れ様である。

右の歌は、自分の人生の長さを頼りにして、はかなく過ごす月日がいづまで続くことかと詠む。仏教の無常思想に基づく嘆きを、技巧をこらさず、素直に詠んだ歌と見られる。

俊成の判詞は、左歌については、まず篁の詩句により「秋の心」で「愁」の意を示した点を、「いとをかしく」と評しているが、判詞の終わりの方では「さりととも秋の心しるらん」と詠んだ心に目を向けて、「あはれにきこゆ」とも評している。

右歌については、言葉を飾らず、「まこと」を伝える詠み様に着目しているようである。「言葉続き文字すくなきにきこえてよろしく」と言っているが、これは、言葉続きの上で表現を飾るような言葉を用いず、真に必要な言葉だけに絞って用いていると見て評価したものかと思う。そして、このような詠み様も「叶<sup>ハ</sup>風体<sup>フウテ</sup>」ものであり、「一つの姿」、

独自の姿であると評価しているのが注目される。

十番 左勝

<sup>135</sup>身のほどのおもふばかりはいはれねどしるらんものを神のところに

右

経盛卿

ねぎ事をわきてあはれとおもはん神のめぐみはあまねけれど

左歌、ことばほかにあらはさざれど、こころうちにこもりて、優  
にきこえ侍り。

右歌も、さる事なりときこえて、なんなくは侍れど、左なほ、お  
もふばかりはなどいへるすがた、よろしくみえ侍り。よりて左の  
かちと申し侍るべし。

【通釈】

十番 左勝

大輔

<sup>135</sup>私の身の上は、心に思うほどには言い尽くせないけれど、神のみ心  
には御存じのことでしょう。

右

経盛卿

<sup>136</sup>私の祈る事柄を、(神に)とりわけいとおしく思つてほしいのです、  
——神のいつくしみは、広く行き渡るものだけれども。

左の歌は、言葉として表面に言い表わさないが、心が内部にこめ  
られているのが感じられて、優美に思われます。

右の歌も、なるほどと思われて、非難すべきところのない作では  
あるのですが、左の歌はやはり、「思ふばかりは(言はれねど)」  
などと詠んでいる姿が、結構に見えます。そのため左の勝と判定  
しましょう。

【注】○おもふばかりはいはれねど 心に思うほどには十分に言い表  
わすことができなけれど。源明賢の歌「なげきあまりしらせそめつ  
る言の葉も思ふばかりは言はれざりけり」(『後葉集』三二七、『千載集』  
六六〇)によつた語句か。○ねぎ事 神仏に祈願する事柄。  
【考察】左右の歌は、ともに神に嘆き寄る趣の作であるが、左の歌は、

一身上の嘆きは十分言い尽くせないが、神は知つてくださることであ  
らうと詠む。上句の「思ふばかりは言はれねど」は、「注」に引いた源  
明賢の歌の「思ふばかりは言はれざりけり」(『後葉集』恋、三二七。  
『千載集』恋、六六〇)の句を新しく生かしたものかと思う。

右の歌は、神の恵みは広く行き渡ることと知つてはいるが、自分の  
願いを特にあわれと思つていただきたいと詠む。

俊成の判詞は、左歌を、言葉に十分言い表わさないが「心内にこも  
りて、優に」思われると評する。そして右の歌を、歌の心は理解され  
難点のない作と見ながらも、やはり左歌で「思ふばかりは(言はれね  
ど)」などと詠んだ姿が「よろしく見え」と言い、左の勝と判定する。  
これは右歌が心を十分言い尽くしていると思えるのに対して、左歌  
は「思ふばかりは言はれねど」と詠む点に、言葉にならない深い心を  
俊成は感じて評価したものである。前の九番の判詞に引いていた「誠  
之至リテキハ、其詞無詞」と同様の考えに基づいて、「言葉外にあらはさ  
ざれど、心内にこもりて」と評しているように思われる。

この「心こもる」という評語は、『住吉社歌合』では、述懐二十二番  
に見えるが、『広田社歌合』では社頭雪二番、海上眺望九番、述懐三番  
とこの十番の判詞に見え、俊成がこのころ新しく用い始めた評語であ  
らうと思う。

十一番 左勝

頭中将実宗朝臣

<sup>137</sup>わがきみののどけきみよにつかへても神のめぐみをたのむをしれ  
右 右馬権守隆信

な

<sup>138</sup>しらはまのまさごのかずにあらぬ身もめぐみひろたのなをたのむか  
左歌、外者事「聖朝」、内者仰「神徳」、まことにしかあるべき事と  
きこえて、いとをかくこそ侍れ。これ雅頌の歌の作いなるべし。  
ことのととのほり、ただしく、よをほめて、神につぐるなりとい  
へり。まことにかくこそ侍らめとみえたり。

右歌、ことなる事はなけれど、おまへのはまのまさごに身をよそへて、かみのめぐみをたのめるころ、ほどにつけてはおなじくや侍らんとて、持と申し侍るべし。

【通釈】

十一番 左侍

頭中将実宗朝臣

<sup>137</sup>わが君の治められる、平穏なみ代にお仕えしていても、神の恵みをお頼りしていることは、知っていたきたいのです。

右

右馬権守隆信

<sup>138</sup>白砂の浜の、砂の数ほど多い人の、その数にも入らぬ私も、恵みが広く及ぶという広田の神だから、お頼り致すのです。

左の歌は、外部では聖王のみ代に仕え、心中には神の威徳を敬うことを詠んでおり、実にしかるべきことと思われて、大層感興をおぼえるのです。これは雅頌の歌の姿であろう。雅頌の歌は、物が事が整って秩序正しい様子を伝え、そんな治世をたたえて神に告げるものだと言われている。まことに、この左歌のように詠むものでしょうと思われた。

右の歌は、格別のことはないけれど、御社前の浜の砂に自身をなぞらえて、広田の神の恵みを頼りに思っている心を詠んだもので、歌の程度に関して言えば左右は同等だろうかと考えますので、持と申しておきましょう。

【注】○わがきみ、（ここでは高倉天皇 ○たのむとをしれ、このの「を」は問投助詞で、「頼むと」を強調して示す。○しらはま 白砂の浜。○まさごのかずにあらぬ身 「まさごのかず」は、砂の数が多いことに例えて、人の数の多いことを言い、それに「かずにあらぬ身」（人数に入らないような、とるに足りない身）を重ねた表現。○雅頌の歌 『詩経』（毛詩）大序に挙げる詩の六義（六種の体）は、風・賦・比・興・雅・頌であるが、『古今集』真名序ではこれを和歌の六義として挙げ、仮名序では「歌のさま六つ」として各体に和名を当てている。その場合の雅・頌の歌（仮名序では、ただこと歌・いはひ歌）である。『詩経』の

『広田社歌合』注釈（二）

「雅」は周王朝の宮廷歌、「頌」は祖先神を祭る歌であったようだが、なお後世さまざまな説明が加えられてもいる。この俊成の判詞では、次の「ことのとこのほり」以下の文が『古今集』仮名序の古注の文と一致しているので、そこから俊成の頭にある「雅頌の歌」の内容がある程度推測される。○ことのとこのほり、ただしく『古今集』仮名序の「ただこと歌」（真名序の「雅」に当たる）に関する古注に、「これは事のとこのほり、ただしきをいふなり」とあるのによる。物が整って正しい、治世の様子であろう。○よをほめて、神につぐるなり『古今集』仮名序の「いはひ歌」（真名序の「頌」に当たる）に関する古注に、「これは世をほめて、神につぐるなり」とあるのによる。治世をほめたたえて、神に告げるものだと意であろう。

【考察】左右の歌は、ともに神の恵みを頼む心の作であるが、左の歌は、天皇の御治世の下に平穏に暮らす身ながら、神の恵みを頼りにしていることを知っていたきたいと、神前に申し述べた趣の作である。

右の歌は、御社前の浜の砂の数ほど多い人の中で、人数にも入らぬような自分も、広く恵みをかけられる広田の神ゆえお頼りするとの心を詠む。「めぐみ広田の神」に頼るといった表現は、九番左歌などにも見られたもので珍しくないが、「白浜のまさごの数にあらぬ身」は、一応独自性のある表現と言えるであろう。

俊成の判詞は、左歌の内容を「まことにしかあるべき事」で「いとをかしく」と評価し、「雅頌の歌」の体の典型的なものとしている。右歌については、「ことなる事はなけれど」と言いながらも、社前の浜の砂に身をなぞらえて神の恵みを頼った心を認め、持と判定している。

十二番 左侍

右中将頼実朝臣

<sup>139</sup>けふまではかくてくらしつゆくすゑをめぐみひろたの神にまかせん

右

皇后宮亮季経朝臣

<sup>140</sup>いとひつつすてもやられぬうき身かなあやしやたれかをしむなるら

左、かくてくらしつゆくすゑをといひて、めぐみひろたの神にまかせんと侍るもじつづき、いとをかしくも侍るかな。

右歌、いとひつづすてもやられぬうきみかなといひおきて、あやしやたれかとすゑられて侍るころ、又いとあはれにこそみえ侍れ。このつがひ、まことにおもひみだれ侍りぬ。ただし、左歌なほ神をかけたつまつられたるうへに、うたのころゆくすゑとほくみえ侍り。よりてなほ以左為勝。

【通釈】

十二番 左勝

右中将頼実朝臣

<sup>139</sup> 今日までは、こうして(どうにか)暮らした、——行く末のことは、恵みを広く与えてくださる広田の神にお任せしよう。

右

皇后宮亮季経朝臣

<sup>140</sup> いといながら、捨てきることもできない、憂き身ではある、——ふしぎなことだ、だれがこの身を惜しむというのだろうか。

左の歌は、「かくて暮らしつ行く末を」と言つて、「恵み広田の神にまかせん」と詠んでいます言葉の続け様が、大層面白く思われることです。

右の歌は、「いとひつづ捨ててもやられぬ憂き身かな」と言った上で、「あやしやたれか(惜しむなるらん)」と詠まれています心が、また大層感深いものに思われます。この左右の歌の組み合わせは、(いずれを勝とするか)まことに思い悩みました。ただし、左の歌はやはり神に関連させて詠まれているし、歌の心が遠く将来に及ぶと見えます。そのため、やはり左の歌を勝とします。

【注】○すてもやられぬうき身 捨てきることもできない憂き身。この場合、身を捨てることは、出家することであろう。

【考察】左の歌は、今日まではこのように暮らした、今後のことは「めぐみ広田の神」にお任せしよう、との心を平明に詠んでいる。

右の歌は、憂き身をいといながら出家することもできずにいるが、この身を惜しんでくれる人も思い当たらないので「あやしや」と省み

た心であろう。

俊成の判詞は、左歌については、上句から下句への言葉の続け様を「いとをかし」と評している。また右歌については、上句から下句に続けたところに見られる心を「いとあはれに」と評している。それで左右の歌の優劣の判定に思い悩んだとした上で、左歌が神のことを詠み入れている点と、左歌の心が「行く末遠く」及ぶと見える点から、左の勝としている。

【備考】十二番左歌は『新統古今集』(二二二八)に収められている。

十三番 左勝

修範朝臣

<sup>141</sup> いたづらにうきよもなかなばすぐるまでおくりむかふるはてぞゆかしき

右

寂念

<sup>142</sup> ねざめしてものぞかなしきむかしみし人はこのよにあるぞすくなき左歌、うきよもなかなばすぐるまでといへるわたり、よろしくこそきこえ侍れ。

右歌は、すがたさびてころほそく、げにさる事なりときこえ侍るを、ものぞかなしきとおき、あるぞすくなきといへる、その字、きの字、おなじさまにぞきこえ侍る。歌合にはさるべき事なるべし。

左は、すゑの、ゆかしきといふことばや、すこしいかにぞおぼえ侍れど、それはあまりの事なり。以左勝と申すべし。

【通釈】

十三番 左勝

修範朝臣

<sup>141</sup> むなしく、つらい人生の半ばを過ぎるまで年月を経た、この身の行く末が知りたいと思う。

右

寂念

<sup>142</sup> ふと目覚めて、何となく悲しい、——以前の知り合いは、もうこの世にいる人が少ないのだ。

左の歌は、「憂き世も半ば過ぐるまで」と詠んだあたりが、結構に思われます。

右の歌は、姿がさびて、心細い感じで、実にもっともなことだと思われませんが、「ものぞ悲しき」と言った上で「あるぞ少なき」と言っているのは、「ぞ」の字に「き」の字を用いた言い方が、同じように感じられます。こういうことは、歌合では避けるべきことでしょう。

左の歌は、末句の「ゆかしき」という言葉が、少しどうかと思われませんが、そこまでとがめるのは厳し過ぎるというものです。左の歌を勝と判定しましょう。

【注】○おくりむかふる 年月を経る。古い年月を送り、新しい年月を迎える意であろう。○さびて 「海上眺望」二番の「注」「考察」参照。○さるべき事 避けるべき事。

【考察】左の歌は、「憂き世も半ば過ぐるまで」、むなしく年を経た我が身の行く末はどうなるのか、知りたい、と詠む。作者の藤原修範は少納言通憲（信西）の子で、平治の乱後一時隠岐に配流されたこともあるが、この歌合の当時は三十歳、従四位上左京大夫だったようで、その半生を顧みての述懐である。

右の歌は、夜ふと目覚めて、旧知の人々を思い浮かべ、その多くが世を去ったことを思い、物悲しさをおぼえたと言む。作者の寂念は俗名藤原為業、丹後守為忠の次男で、この歌合の当時の年齢は不詳であるが五十歳前後かと推測され、当時としては老境、出家の身での述懐である。左右いずれも、作者の境遇に応じた率直な述懐の歌と見られる。

俊成の判詞は、左歌については、「憂き世も半ば過ぐるまで」と詠んだあたりを「よろしく」思われると評している。人生の半ばを過ぎるまでむなしく年月を経たという感慨を、切実なものとしたのである。

右歌については、「姿さびて、心細く、げにさる事なり」と評してい

る。「さび」という評語は、簡素で落ちついた古風とも言える表現に聞かして、俊成が用いた評語として注目されるところである。俊成はこの評語を、『住吉社歌合』判詞に一例残しているが、この『広田社歌合』判詞には、海上眺望二番、同十三番、同十八番と、この述懐十三番の四つの用例が見られる。そして、この用例以外の四例は叙景的な歌に対して用いているが、この用例は述懐の歌に対して用いた点が異なっている。

ただ俊成は右歌の問題点として、第二句「ものぞかなしき」と第五句「あるぞすくなき」に、「ぞ」「き」が同じ位置で重なっていることを指摘する。歌病に言う文字病は、あまり意味のない形式的な指摘にすぎない場合が多いが、この場合は、二つの句がともに「ぞ」の後に形容詞の連体形で末尾の「き」になる語が続いており、その重複が耳障りになるという指摘なので、相応に意味をもつと思われる。これはさしたる問題ではないと言えはそれまでのことだが、俊成は「歌合には避るべきこと」と言い添えており、歌合の歌はいささかの難点もないように配慮すべきだという考えに基づいて特に指摘したと見られる。それで難点のない左歌が勝とされている。

#### 十四番 左

神祇伯頭広王

143 むかしよりちかひひろたの神なればいのりもなるとぞきく

右

道因

144 すみのえにむこのうら風たちそひてふたたび神のめぐみをぞまつ  
左右のうた、いみじくをかくこそみえ侍れ。左の、ちかひひろたの神なればとおきて、いのりもなるとぞきくといへる、このたびの歌合にかならずあるべかりける事かなとこそきこえ侍れ。

右又、ふたたび神のめぐみをぞまつといへるころすがた、まことにはあれにみえ侍れば、このつがひの勝負は神慮にまかすべし。よりて不<sub>レ</sub>加<sub>二</sub>愚判<sub>一</sub>耳<sub>（下三首書後）</sub>。

【通釈】

十四番 左

神祇伯頭広王

143昔から、広く衆生を救う誓いを立てられた広田の神だから、祈ることとはかなえられるものと聞いております。

右

道因

144前の住吉の社の歌合に続いて、今武庫の浦への広田の社に歌合をささげ、ふたたび神の恵みを待つ次第です。

左右の歌は、極めて感興深く思われます。左の歌で、「誓ひ広田の神なれば」と言つて、「祈る祈りもなるをとぞ聞く」と詠んでいるのは、今度の歌合に必ず詠まれるべきことであつたと思われまふ。右の歌も、「ふたたび神の恵みをぞ待つ」と詠んだ心や姿が、まことに心をうつものと思われまふので、この左右の組み合わせの勝負は、神のおぼしめしに任せることに致しましょう。そういうことで、私の判定は加えないことにしました。

【注】○ちかひひろたの神 広く衆生の救済を誓願とする、広田の神。衆生救済の誓願は本来は仏のものであるが、神仏習合の見方により、ここでは広田の神について言つた。○いのりもなるを 祈願が成就する意の「祈りも成る」に、地名「鳴尾」を掛けて言つた。「鳴尾」は、西宮市の武庫川河口付近の地で、広田神社に近い。○すみのえ 住の江。今の大阪市住吉区のあたり。ここにある住吉神社に、嘉応二年（一七〇）藤原敦頼（道因）が勧進して奉納した『住吉社歌合』を示す。○むこのうらかぜ 武庫の浦風。「武庫の浦」は、今の六甲山の南方の海岸で、そこに吹く風。その浦に近く位置する広田神社に、道因が勧進し奉納した『広田社歌合』を示す。

【考察】左右の歌は、ともに広田の神を信じ頼る心を詠んでいるが、左の歌は、広く衆生を救済する誓願を立てられた広田の神ゆえ、祈ることはかなえられると聞くとの心を、「誓ひひろたの神」、「祈りもなるを」と、掛詞で広田・鳴尾を織りこんで詠んでいる。

右の歌は、前の『住吉社歌合』に続いてこの『広田社歌合』を神に

ささげ、ふたたび神の恵みを待つとの心を、「住の江に武庫の浦風立ちそひて」以下の表現で示す形で詠んでいる。一首の心は、二つの歌合を勧進した道因の率直な気持ちであるう。

俊成の判詞は、まず左右の歌を「いみじくをかしく」見ると概評し、左歌については今度の歌合に「必ずあるべかりける事」と言い、右歌については下句を挙げて心姿が「まことにあはれに」見えると言つて、勝負は神慮に任せるとし、自身の判定を控えている。

十五番

左持

賀茂政平

145ながらへてよにある事はつのくにのいくたのもりのなにこそありけれ

右

憲盛

146かぞふればやそぢさかゆくたらちねのかげにかくれて身こそおいぬれ

左歌、すがたことばづかひはをかしくみえ侍り。なにこそありけれといへる心ぞ、いともころえられ侍らねど、おほころはみえて侍るべし。

右歌、ことによそへたる事などぞみえ侍らねど、うたのころあはれにみえ侍り。左歌も、いくたのもりなど侍れば、なほ持と申すべし。

【通釈】

十五番

左持

賀茂政平

145長く生きて、この世にいるが、これは撰津の国の、生田の社の森の名で（その名に背かないこと）あるのだ。

146数えると、年八十の坂を越え、ますます栄えると見える親の、その陰に隠れて、我が身はすっかり老いてしまった。

左の歌は、その姿や言葉の用い様は面白いと思われまふ。（ただし）「名にこそありけれ」と詠んだ心は、あまりよく分からないのです。が、およその心は表わされているでしょう。



右の歌も、「ながらへゆくと神はしらなん」と詠んだ心は、感深く思われますが、歌の初めの方の言葉はやはり、（左歌で）「朽ち木の花に身をなして」と詠んでいる方が、結構に思われるでしょう。そのため左の勝とする。

【注】○くちきのはなに身をなして 花の咲かない朽ち木のような状態に身を置いて。「かたちこそみ山がくれの朽ち木なれ心は花になさばなりなむ」（古今集）八七五、兼芸法師）、「花さかぬ朽ち木のそまのそま人のいかなるくれに思ひいづらん」（仲文集）一四、『新古今集』一三九八、藤原仲文）などの歌によって、ここでは世の人から見捨てられた身を「朽ち木の花」の語で表現した。○こころの春 心のどかな状態、あるいは心の満ち足りた状態を言ったのであろう。ちなみに「心の秋」の用例は『古今集』以下に見られるが、「心の春」はこの用例あたりが最も古い例に属するか。○よをわたるはし 「はし」は端緒、足掛かりの意があるうが、「橋」を掛けて「渡る」の縁語とする。○ながらへゆく 生き長らえてゆく意であるが、「長柄」の橋（撰津の国の歌枕、今の大阪市北部、淀川と新淀川の分流点の西にある現在の長柄橋付近にあったと言われる）を掛けて、前の「渡る」「橋」の縁語とする。

【考察】左の歌は、自分はいつまで、「朽ち木の花」のような身でいて、「心の春」を待つことになるだろうか、と嘆いている。「朽ち木の花」は、「注」に引いた先行歌の「花さかぬ朽ち木」（『仲文集』一四）などの語によつたと思われる、世人から見捨てられた自分の現状を表わす。「心の春」は、世に認められ相応の地位を得る場合の満ち足りた心を表したのであろう。

右の歌は、自分は世を渡る足掛かりが得られず、それを求めて生き長らえていることを、神には知ってほしい、と愁訴した趣であらう。表現技巧として「渡る」「橋」「長柄」の縁語が目立つ作である。

俊成の判詞は、左歌を「心姿をかしく」と評する。右歌も下句に「ながらへゆくと神は知らなん」と詠んだ心は「あはれ」と評するが、上

句に関しては左歌の「朽ち木の花に身をなして」と詠んだのを「よろしく」思われるとして、左の勝と判定している。

これは確かに、右歌で縁語を用い、「津の国の」を加え、修辭で飾った表現に比べて、左歌で自身を「朽ち木の花」と端的にとらえた表現の方が勝ると言えそうである。

十七番 左持 資隆

にしにのみはこぶ心のしるしをばそなたに今は（御書類從）います神にいのらん

右 右兵衛佐経正

150 むらさきにゆかりのそではなりはててわれのみあけのいろぞかはらぬ

左は、西方の運心をそなたの神にいのり、右は、むらさきのそのなか、あけのいろをうれへられて侍り。ひとつはあはれに、ひとつはめぐらし。このころたがへりといへども、うたのほどおなじくみゆ。よりて持とす。

【通釈】 十七番 左持 資隆

149 ひたすら西方（浄土）に向ける心に、御利益があるよう、その方に鎮座される（西の宮の）神にお祈りをしよう。

右 右兵衛佐経正

150 縁者たちは皆、（四位以上の）紫の袍まうを着る身になってしまつて、私だけ（五位の）緋の袍の姿が変わらないのです。

左の歌は、西方浄土に思いを巡らすについて、西の方に鎮座される神に祈り、右の歌は、（四位以上の）紫の袍を着た人々の中に、（五位の）緋の袍の姿でいることを嘆かれています。前の一首は感深く、後の一首は目新しく思われる。二首の趣意は違っているけれども、歌の程度は同様と思われる。そのため持とする。

【注】○にしにのみはこぶ心 ひたすら西方浄土に向ける心、○しる効験。御利益。○そなたにいます神 その方に鎮座される神。西

の宮の神（広田の神）を言う。七番の「にしてふ神」の「注」参照。

○むらさき 四位以上の人の着る袍について言う。『和歌色葉』に「むらさきの衣、四位已上衣也」と記し、『八雲御抄』も「むらさきの袖」を「四位以上至大臣」と注する。○ゆかり 縁者。○あけのいろ 五位の人の着る袍の緋の色を言う。『和歌色葉』に「あけの衣、五位衣也」と記し、『八雲御抄』も「あけの衣」を「五位」の異名とする。○

運心 仏語。心を向けること。また、心を巡らすこと。

【考察】左の歌は、西方浄土の往生を願うところから、西の宮の神に祈ろうと詠んでいる。西方浄土に西の宮を結びつけた趣向は、前の七番左の俊恵の歌と共通する。

右の歌は、縁者たちが皆紫の袍を着る地位に昇進した中で、自分だけ五位の緋の袍の姿が変わらないと嘆いた作であろう。典拠として「悪紫之奪」朱也」（『論語』陽貨）を挙げる説もあるが、経正の述懐の歌に用いられる可能性はどうかであろうか。関係があるとすれば、この言葉を作者がヒントにして紫と「あけ」の色の対比を用いた可能性が考えられる程度のことではなからうか。なお、作者の経正は平経盛の長男で、当時の平家一門の中の自らの地位を顧みての述懐と思われる。俊成の判詞は、左歌を「あはれ」と評し、右歌を「めづらし」と評している。これは左歌については、その西方浄土への往生を願うひたむきな心を認め、右歌については、官位昇進に遅れをとったことを嘆くのに袍の色の違いをとり上げた点を特色と見たのであろう。それで歌の趣意は異なるが、「歌のほど」は同等と見て持としている。

十八番 左

広季

151 くらゐやまたかねのくもをよそにみてかかる身とだにしらぬぞうき

右勝

広言

152 いかにせん人なみならぬ身なせがはさすがによにはすみわたりつつ左歌、かかる身とだになどいへるすがた、いとよろしくこそみえ

『広田社歌合』注釈（二）

侍れ。ただし、たかねのくもやすこしあまりにきこゆらん。されど、諸道につけてみちをきはめ、いへをおこすものをも、たかねのくもなどかいはざらんや。

右歌のみなせがはは、このことばあひかなひて、をかしくもみゆ。かつと申すべし。

【通釈】

十八番 左

広季

151 高い位に昇った人を、（高嶺の雲を見るように）よそ目に見て、不遇に甘んじているが、こういう身とさえ人に知ってもらえないのは、情ない。

右勝

広言

152 どうすればよいのだろう、人並みに扱ってもらえない我が身は、――さすがにこの世には住み続けているが。

左の歌は、「かかる身とだに（知られぬぞうき）」などと詠んだ姿が、大層結構に見えます。ただし、「高嶺の雲」は少々度を越えた言い様と思われるでしょうか。しかし、さまざまな方面で、その道の最高の位置まで到達し、家を興す人のことを、「高嶺の雲」と（例えて）言えないわけはあるまい。

右の「水無瀬川」の歌は、心と言葉がよく適合して、面白く見える。勝ると判定しましょう。

【注】○くらゐ山 五番の「注」参照。○かかる このような、の意であるが、雲が掛かると言うところから、前の「雲」の縁語。○人なみ 人並みの意であるが、「なみ」に波を掛けて、後の「みなせ川」の縁語にしたものであろう。○身なせがは 「身」に「水無瀬川」を掛ける。「水無瀬川」は、摂津または山城の歌枕とされる川で、今の大阪府三島郡島本町を流れ、淀川に合流する。○すみわたりつつ 住み続けている意であるが、「澄み」「渡り」を掛けて「水無瀬川」の縁語にしている。

【考察】左右の歌は、ともに不遇の身を嘆く心を詠むが、左の歌は、

高位の人をよそ目に見て過ごす身だが、「かかる身とだに知られぬぞ憂き」と、嘆きの源を掘り下げて示している。修辞技巧としては、「高嶺の雲」を比喻に用い、その縁語で「かかる」と言っている。なお峯岸義秋氏は『歌合集』頭注で、この「高嶺の雲」の歌が、『新古今集』に見える、

よそにのみ見てややみなんかづらきや高間の山のみねの白雲（九  
九〇、よみ人しらず）

の一首を思わせると指摘されている。一首は『和漢朗詠集』（四〇九）に、第三句「かづらきの」として収められ、『俊頼髓脳』（一〇八）にも引かれる歌で、左歌と共通する語句がある程度見られるから、左歌に影響した可能性は考えられるであろう。

右の歌は、「いかにせん」と「人並みならぬ身」を嘆き、「さすがに世には住みわたりつつ」と言い添えている。修辞技巧として、水無瀬川に関する縁語を織りこんでいるが、歌の心は素直に詠み表わされていると思う。

俊成の判詞は、左歌については、「かかる身とだに（知られぬぞ憂き）」などと詠んだ姿を「いとよろしく」見えると評価する。ただ高位の人を「高嶺の雲」に例えたのは、少々度を越えた表現ではないかと問題点を挙げ、しかしそういう表現も思えば不思議ではないと、結局容認する考えを記している。

もっとも、この左歌の問題点をとり上げた俊成の見方は、右歌の批評に続いているかと思われる。すなわち右歌について「心言葉あひかなひて」と評したのは、左歌のような度を越えたとも考えられる表現が右歌に見られない点を、心に言葉がよく適合していると評価したのではなからうか。

また、右歌については「をかしくも見ゆ」とも評している。これは縁語を織りこんだ表現のことも意識した批評かと思うが、ともかく俊成は右歌をそのように評価して、勝と判定している。

### 十九番 左持

153 いかにせんたのみしみづのたえぬれば身をうきくさうきくさのよるかたぞなきよるかたもなき群書類從

右

親重

154 かずならぬころにだにもいとはれておきどころなき身とぞなりぬる

左右のうた、ころすがたとりどりにして、いうにきこゆ。持とすべし。

### 【通釈】

十九番 左持

親重

153 どうすればよからう、頼りにした人と縁が切れたので、この身がたらく嘆くばかり、浮き草同様、寄る辺もないのだ。

右

朝宗

154 とるに足りないわたしの心にさえ、（わが身が）いとわしく思われて、この世に置き所のない身となってしまった。

左右の歌は、その心や姿がそれぞれ違った特色をもち、優れた作と思われる。持としよう。

【注】○たのみしみづのたえぬれば 頼りにした人と関係がなくなつたので。「水」を人の比喻に用い、後の「浮き草」と縁語にした。○身をうきくさ 小野小町の歌「わびぬれば身をうき草の根をたえてさそふ水あらばいなむとぞ思ふ」（『古今集』九三八）による。「憂き」と「浮き草」を掛けた。「浮き草」は、水の中で根が固定しないことから、よりどころのない不安定な人生の例えに用いられる。

【考察】左右の歌は、ともに心細い身の上を嘆く趣であるが、左の歌は、頼りにした人と縁が切れたので、つらいわが身は浮き草同様、寄る辺がない、どうしたものかと嘆いている。これは小野小町の歌、

わびぬれば身をうき草の根をたえてさそふ水あらばいなむとぞ思ふ（『古今集』九三八）

により、その語句をとり入れて、頼れる人を失った身の心細さを嘆い

た作であろう。

右の歌は、自分の心と身とを分けてとり上げ、わが心にさえいとわかれて、わが身はこの世に置き所のないものになったと嘆いている。このように、自分の心と身とを対立する存在として二元的にとり上げることは、平安時代末期のころから特に目立つ傾向のようである。

俊成の判詞は、左右の歌は「心姿とりどり」の特色をもち、ともに「優」であると言い、持としている。

二十番 左持

な 左歌よしかたもなき身のうれへをばこころひろたの神ぞしるらん  
右歌よしかたもなき身のうれへをばこころひろたの神ぞしるらん

右

伊網

156 かこつべきかたもなき身のうれへをばこころひろたの神ぞしるらん  
左歌よしくきこえ侍り。なかのいつもじやすこしささへてきこ  
ゆらん。

右歌、かみのくにおもひあまれるころろみえて、いとあはれにこそ侍れ。はてのくのしるらんといへるや、なほおもはまほしく侍らん。又持と申すべし。

【通釈】

二十番 左持

155 嘆かないのも嘆くのも、夢のような（はかない）世のことと思う度に、目覚める気がしながら、迷いから覚めぬ我が身ではある。

右

伊網

156 嘆いて訴えるあてもない、この身の悲しみを、心の広い広田の神こそ、御存じのことであろう。

左の歌は、結構に思われます。ただ、中の五文字（「見るたびに」）は、少しそこで歌の流れがさえぎられる感じがするでしょうか。右の歌は、上の句に思案に余っている心が見えて、大層心をうたれるものがあります。ただ、終わりの句に「神ぞ」知るらん」と

詠んでいる所は、なお考慮を要するだろうかと思えます。ついでには、これも持としましょう。

【注】○おどろきながらおどろかぬかな「おどろく」は、はっと気づく、目覚める意で、前の「夢」を受けて言う。（夢のようなはかない世のこと）その時は気づき、目覚める気がしながら、結局迷いから覚めないでいる、と省みた心であろう。○ささへてきこゆ（歌の流れを）妨げていると受けとられる。「ささふ」は、ささえざる意。

【考察】左の歌は、「嘆かぬも嘆くも」夢と見る度に、「おどろきながらおどろかぬ」と、同じ動詞を否定と肯定の形で繰り返す言い様を、上句と下句に用いたのが目立っている。修辭の面で作者の工夫したところかと思う。歌の発想の中心は、夢のような世のことと見る度に、目覚める気がしながら、結局迷いから覚めきれずにいると、自省した心であろう。このような発想は、次の西行の歌の場合と共通する点があると思う。

世の中を夢と見る見るはかなくも猶おどろかぬわが心かな（山家集）七五九

ただ西行の歌が端的に心を伝えているのに比べると、左歌は同様の心を前記のような修辭上の工夫を加えて詠んでおり、それが両者の印象の違いに影響しているかと思う。

なお、同様の心を、言葉の順序を逆にして詠んだ作に、次の登蓮の歌もある。

おどろかぬわが心こそうかりければかなき世をば夢と見ながら（千載集）一一三五

これらの仏教思想に基づく自省の歌に共通する発想の型は、この時代に定着したものと思われる。

右の歌は、「心広き」を「広田」に掛けて、嘆き訴えるあてもない我が身の悲しみを、広い心で情けをかけられる広田の神こそ御存じであろうと詠んでいる。こういう「広き」を掛けて「広田の神」を言う用例は、『広田社歌合』の述懐の歌に集中的に見られ、「心広田の神」の

外にも「めぐみ広田の神」(九番左、十二番左)、「ちかひ広田の神」(十四番左)などがあるが、「心広田の神」のもう一つの用例は、六番左の三河内侍の歌に見られた。

おしなべて心広田の神ならばかかるうき身をめぐまざらめや  
これも当面の右歌と発想に似た点がある。

俊成の判詞は、左歌については、「よろしく」と評価するが、第三句「見るたびに」が「すこしささへてきこゆらん」と批判する。これは先に引いた西行の歌の「見る見る」や登蓮の歌の「見ながら」と比べると、「見るたびに」はより限定した言い様であるため、前後のおおらかな歌の流れがそこで途切れる感じになるのを指摘したのかと思う。

右歌については、上の句に思案に余った心が見えて「いとあはれに」思われると評価するが、終わりの句の「知るらん」はなお考慮を要すると批判している。これは、具体的にはどんな点を俊成は批判したのであろうか。

この点について、峯岸義秋氏『新訂歌合集』では、「なほ思はまほしく侍らん」の頭注に次のように説明されている。

上句に對するものとしては調子が低い。上句の切なる歎きに對するものとしては、下句はあまりに冷静である。心姿、上下相叶はずと評されても仕方があるまい。

けれども、二年前の『住吉社歌合』では、述懐二十二番右歌に、池水の言ひいれずとも思ひかね深きうれへを神は知るらむ(藤原憲経)

の一首があり、これも深い嘆きを「神は知るらむ」と詠んだ点は、当面の右歌とさして変わらないように見えるが、俊成の判詞では問題視することはなく、

深きうれへを神は知るらむといへる、心こもりて、すこしはまさるべくや。

と言っている。この場合「深きうれへを神は知るらむ」を「心こもり

て」と評価しており、この言い様を冷静すぎると問題視した形跡は見られない。

そこで、俊成はこういう歌の場合、「神は知るらむ」ならよいが、「神ぞ知るらむ」は問題があると見たと考へてはいかがであろう。このことを確かめる手掛かりとして、俊成が目にしたはずの『古今集』から『千載集』までの勅撰和歌集の歌の中に、まず「神ぞ知るらむ」の用例を求めると、次の四首が見られる。

(1) 伏しておもひ起きてかぞふるよろづ世は神ぞ知るらむわが君のた  
め(『古今集』三五四、素性法師)

(2) 内侍のかみの右大将藤原朝臣の四十賀しける時に、四季の絵書  
けるうしろの屏風に書きたりける歌

春日野に若菜つみつつよろづ代をいはふ心は神ぞ知るらむ(『古今集』三五七、素性か)

(3) 天曆御時齋宮下り侍りける時の長奉送使にてまかり帰らむとて  
よろづ世の始めとけふを祈りをきて今行く末は神ぞ知るらん(『拾遺集』二六三、中納言朝忠)

(4) あめつちの神ぞ知るらん君がため思ふ心の限りなければ(『拾遺集』  
六五九、よみ人しらず)

この四首の内、(1)(2)(3)の三首はいずれも賀の歌で、長寿や御代の永続を祝う心を主とし、このことは「神ぞ知るらむ」と詠んでいる。(4)の「よみ人しらず」の一首だけは恋の歌で、君を思う心の強さは「神ぞ知るらん」と誓ったものである。

これらの歌の場合、「神ぞ知るらむ」という表現を俊成が問題視した形跡は全くない。そして当面の右歌と同様に「神ぞ知るらむ」を末尾に置いた(2)(3)の歌などは、俊成は歌として評価したらしいので、これは(2)を後に「古来風体抄」に抄出していることや、(3)も俊成撰とされる『三十六人歌合』に見えることなどから考えられる。それで、いわば公的な性質をもつ賀の歌のような場合は、「神ぞ知るらむ」という表現に問題はなかったと思われる。

一方、「神は知るらむ」の用例を求めると、『千載集』までの勅撰和歌集の歌の範囲では、次の一首のみが見られる。

蔵人にて侍りける時、御祭の御使にて難波にまかりてよみ侍りける

思ふこと神は知るらん住吉の岸の白波たよせなりとも（『後拾遺集』一〇六七、源頼実）

この歌は、祭の使いという便宜での参詣でも、自分の心に祈願することを「神は知るらん」と詠んでおり、雑の部に収められているが、神に祈った述懐の作と見られる。ただ俊成がこういう先例をどう見ていたかは分からないので、その点の知られるような用例を別に求めると、先に挙げたとおり、『住吉社歌合』述懐二十二番右歌の「深きうれへを神は知るらむ」に対して、俊成は「心こもりて」と評価していた。

また、『広田社歌合』の奥に、俊成が自らの感懐を託した次の一首が見られる。

しきしまや道はたがへずと思へども人こそわかぬ神は知るらん（一七五）

この一首は、俊成自身の思いを他人は知ってくれなくても「神は知るらん」と詠んでいる。これらの用例は、述懐の歌で、個人的な思いを神に訴えるような歌の場合、「神は知るらむ」という表現を妥当なものとして俊成が認めていたことを示すものであろう。

以上のことから考えると、公的な賀の歌などの場合に「神ぞ知るらむ」を、また個人的な述懐の歌などの場合に「神は知るらむ」を用いた用例が見られ、それぞれを俊成は妥当なものとして見ていたように思われる。

「神ぞ知るらむ」と「神は知るらむ」との相違は、「ぞ」がいちずに強く指定する助詞であるのに対して、「は」が他の物事と比べて指定する助詞である点の違いに帰する。すると、公的な性質をもつ賀の歌などの場合は、長寿や御代の永続に関するものについて、「神ぞ知るらむ」と神慮を強く提示するのが適当なのであろう。それに対して、神に訴

えて祈る述懐の歌のような場合は、人は知らなくても「神は知るらむ」と言う方が、神にすがる気持ちが出てふさわしいということがあるのではないか。この後者の場合に、「神ぞ知るらむ」と強く言うのは、どうなのか。その点を右歌について俊成は問題にしたのではなからうか。

以上、右歌の「神ぞ知るらん」に対し、俊成が作者に再考を求める批評をした理由に関して、述懐の歌としての妥当性の面から考察を試みた。これについてはなお、俊成の判詞の文面によると、問題の箇所は「はての句の知るらん」であり、「神ぞ知るらん」ではないという見方もあるうかと思う。けれども「知るらん」だけを俊成が問題にする理由は考え難いと思われるし、一般に俊成の判詞は問題の箇所をその一部の語句によって示すことが少なくないので、ここもそういう場合として見たいと思う。

二十一番 左持

157 うきになほせせてもをしむこのよかなそむくころのかからまし  
かば

右

隆親

158 つのくにのなにはの事もうき身にはあしのかれはをよそにやはみる  
左、こころ、もじづかひ、いとをかし。しひてもをしむとやいはまほしく侍らん。

右、すがたことば優にきこえて、させるとがなし。よりて勝負わ  
かちがたし。又持とす。

【通釈】

二十一番 左持

顕綱王

157（生きるのは）つらいのになお、しきりにこの世が捨てがたく思われ  
る、——世を捨てる心が、これほど深ければよいのだが。

右

隆親

158 何事も、つらい思っている我が身には、（難波の）葦の枯れ葉も、よ  
そごとには見られないのです。

左の歌は、心や言葉遣いが、大層面白い。ただ「せめても惜しむ」は「しひても惜しむ」と言いたいところのように思えます。

右の歌は、姿や言葉が優美に思われる作で、これといった欠点はない。そのため左右の優劣は区別し難い。これも持とする。

【注】○せめても ここでは、切実に、甚だしく、といった意であろう。○そむくころ 世を背く心。俗世を離れ、出家する心。○つづくの 津の国の。ここでは枕詞として（撰津の国の地名「難波」）につながる点で、同音の）「何は」にかかる。○なにはの事も 何事も。【考察】左の歌は、この憂き世が捨てがたく思われるが、世を捨てて出家する心がこれほど深ければよいのだが、という述懐であろう。着想として個性的なところがあると思う。

右の歌は、何事もつらい思いでいる不遇な自分には、枯れはてた葦の葉が身につまされて感じられる、との心であろう。「何はの事」に「難波」を掛け、「葦」と関連させて詠んでいる。葦を難波の景物として詠むことは古來行われているが、特に葦の枯れ葉をとり上げる傾向は、平安時代末期からのことなのである。この右歌の外にも、

津の国の難波の春は夢なれや葦の枯れ葉に風わたるなり（『西行上人集』四〇八）

津の国の葦の枯れ葉のかはるにもなにはのことぞ思ひいづらむ（『実国集』七二）

などの歌が見られる。また、「枯れ葉」という言葉は使っていないが、津の国のなにはの事も葦のねこの世はかくて枯れはてねとや（『佳吉社歌合』一四五、中納言）の一首は、一・二句が当面の右歌と同じで、自分の現在の身の上を枯れた葦に寄せて嘆く心がよく似ている。右歌がこの一首から影響を受けていることが考えられそうである。

俊成の判詞は、左歌については、心と言葉遣いを「いとをかし」と評価している。ただ第二句「せめてもをしむ」は「しひてもをしむ」の方がよからうと言いつ添えている。しかし「せめて」も「しひて」も

『古今集』以来使われるが、意味や用法の上で大きな違いは見いださないので、この俊成の指摘の意味するところはよく分からない。あえて考えれば、「せめて」は、この後間もなく新しい意味の用例が目立ってきていることがある。例えば、

しのびあまり天の河瀬にことよせんせめては秋を忘れだにすな（『新古今集』一一二九、藤原経家）

の「せめて」は、今日と同様の意味に用いたものである。俊成は言葉の伝統を重んじる立場から、新しい意味に変わる傾きの見える「せめて」の使用を避けたいと思ったのではないかと考えられるが、推測の域を出るものではない。

右歌については、姿言葉が「優」で、とりたてた欠点もないとして、持としている。

## 二十二番 左

仲綱

159 あまくだる神にとはばやなぞもかくおりてのほらぬくものかけはし

右勝

佐

160 ひとすぢにたのみぞかくるゆふだすきながきうれへを神ややすめん  
左歌、すがたころはをかく侍めるを、あまくだるとおきて、  
又おりてのほらぬといへるや、おなじ事のやうに侍らん。

右の、ゆふだすきは、めづらしき事にあらねど、させるなんなし。  
かつと申すべきにや。

## 【通釈】

### 二十二番 左

仲綱

159 天下られた神にお尋ねしたい、——なぜ私はこのように、雲の懸け橋（昇殿する階段）を降りたまま、のぼることがないのかと。

右勝

佐

160 ひたすら神にすがって、お祈りするばかりです、——私の長い悩みを、神は取り去ってくださることでしょうか。

左の歌は、その姿や心は面白いようですが、初めに「天下

る」と言つて、さらに「降りてのぼらぬ」と言つたのは、同じことを繰り返したような言い方でしょう。

右の「ゆふだすき」の歌は、目新しい作ではないが、これといった欠点がない。勝つと言うべきかと思ひます。

【注】○雲のかけはし 殿上を雲の上に例えて、昇殿する階段を言う。ここで「降りてのぼらぬ雲のかけはし」と言つたのは、六位の藏人で六年以上勤続した者が、五位に叙せられて昇殿する身でなくなる場合を意味する。○ゆふだすき 木綿（木綿）で作つたたすきで、神事に奉仕する時に、これを掛けて袖をからげることから、ここでは「頼みぞかくる」の「かくる」に縁をもたせる一方、「長き」を枕詞的に修飾する語として用いた。

【考察】左の歌は、「雲の懸け橋」の語が宮中で昇殿する階段を意味して用いられることから、注で触れたように、六位の藏人として昇殿していたのが、五位に叙せられて昇殿する身でなくなったことを「降りてのぼらぬ雲の懸け橋」と言っている。そして、これはどうしたことかと嘆き、「天降る神に問はばや」と詠む。このような「雲の懸け橋」を降りる身の嘆きを詠んだ歌の先例には、

限りあれば天の羽衣ぬぎかへておりぞわづらふ雲のかけはし（『後拾遺集』九七八、源経任）

うらやまし雲のかけはしたちかへりふたたびのぼる道を知らばや（『金葉集』五七〇、源行宗）

などの作があるが、この左歌の場合、「雲の懸け橋」の昇降に関することだから「天下る」神に尋ねたいと詠んだところに、趣向上の特色が認められる。

右の歌は、ひたすら神に頼つて加護を願うと言ひ、自分の長い悩みを神が取り除いてくださることを期待している。第三句の「ゆふだすき」は、前の「かくる」に縁をもつてつながるとともに、後の「長き」に枕詞的にかかり、上句と下句を結ぶ修辭として特色が認められると思う。

俊成の判詞は、左歌については、姿や心は「をかしく」思われると評するが、「天下る」と「降りてのぼらぬ」は「同じ事のやう」だと批判している。歌病の同心病に当たる点を指摘したものである。ただ、この歌は「降りてのぼらぬ雲の懸け橋」のことだから「天下る」神に尋ねたいと言ひの趣向とした作なので、同心であると一概に否定するのはいかたであろうか。

右歌については、別に目新しいところはないけれども「させる難なし」と評し、勝としている。

二十三番 左勝

季定

161 なげきあまりやまにいらとも身のうさのまづさきだちてわれをまつらん

右

広盛

162 くらみやまたちものぼらぬ身にしあればうらやまれけりみねのしらくも

左歌、われをまつらんといへる心、いとをかしくこそ待めれ。

右歌、すゑのくなどよろしくは侍るを、もじやまひぞ侍りける。

これはおもきとがにはあらねど、すこしのきずをももとめてこそは勝負をしるし侍らめとて、しひてもとめ侍るなり。よりて左のかちと申すべし。

【通釈】

二十三番 左勝

季定

161 嘆きに耐えかね、（出家して）山に入つても、わが身のつらさがまず先立つて、わたしを待つてゐることであろう。

右

広盛

162 位が高く昇ることのない我が身なので、峰にかかる白雲が、うらやましく思われた。

左の歌は、（身の憂さが）「我を待つらん」と詠んだ心が、大層面白く思ひます。

右の歌は、下の句などは結構には思うのですが、文字病がありました。文字病は重大な欠点ではないけれども、少しの欠点でもあえて追求することで勝負を判定しましょうというつもりで、しいて欠点を求めたのです。そういう次第で左の勝ということにします。

【注】○なげきあまり 嘆いても嘆ききれない気持ちで。○やまにいはる 出家する意味の仏教語「入山」によった言葉であろう。○くらゐやま 位山。五番の「注」参照。○たちのぼらぬ身 高木のぼることのない身。○もじやまひ 文字病。歌病の一種。『俊頼髓脳』に、「文字病といふは、心は変りたれども、同じ文字あるをいふなり。みやまには松の雪だに消えなくにみやこは野辺に若菜つみけり この、みやまこと、みやまなり」など、例歌をいろいろ挙げて説明している。当面の右歌の場合は、第三句の初めの「身」と、第五句の初めの「みね」の「み」とが同音であるのが、問題視されたと思われる。

【考察】左の歌は、我が身の憂さを嘆く思いに耐えかねて、世を捨て山に入っても、身の憂さがまず先立つて待ち受けているだろうと詠む。「身の憂さ」を擬人的にとり上げて、それが先回りして自分の前途に待ち受けると詠んだのは、変わった趣向である。

右の歌は、高い位に昇進しない我が身を嘆く心で、高い位置にある「峰の白雲」がうらやまされると詠んでいる。「峰の白雲」の語は高位の人の比喩として用いたとしても、かなり唐突な感じがするかもしれない。しかし、

桜花さきぬる時は吉野山たちのぼらぬ峰の白雲（『金葉集』四七、

藤原顕季）

の歌を念頭に置けば、「たちものぼらぬ身」と対照する上で適しているとも見られるであろう。

俊成の判詞は、左歌については、「我を待つらん」と詠んだ心を「いとをかしく」と評価している。これは「身の憂さ」が「我を待つ」と擬人的に詠んだ趣向を認めたのであろう。

右歌については、下句など「よろしく」と評価するが、歌病としての「文字病」がある点を指摘している。これは「注」で触れたように、『俊頼髓脳』などに挙げる歌病の考えによって、第三句の初めの「身」と、第五句の初めの「みね」の「み」とが同音である点を指摘したと思われる。俊成は後年、『六百番歌合』（恋七、十一番）判詞に、文字病をとがめることを旧儀とし、『古来風体抄』では、歌病は同心病以外は避けるべきでないと言及に至るが、この『広田社歌合』の判詞では、まだ文字病にこだわっていることが知られる。ただし、これが「重きとが」ではなく、「少しのきず」を求めたものだと言いつ添えているのは、旧儀を疑問視する意識が俊成に芽生えようとしていたことを反映するものかと思う。

また、俊成は前の二十二番判詞では、同心病に当たる点を指摘していたが、この二十三番判詞では、それを無視している。右歌の第一句の「山」と第五句の「峰」の重なる点である。この「山」と「峰」については、次の歌での用例を『俊頼髓脳』にとり上げている。

山桜さきぬる時は常よりも峰の白雲立ちまさりけり（『亭子院歌合』四、『後撰集』一一八）

この歌に対しては、『亭子院歌合』の判詞に「山桜またげり」（『類従歌合』二十卷本。十卷本では「山桜といふことまく」とあるのが、すでに「山」と「峰」の重なる点を問題視しているように思われるが、『俊頼髓脳』では、「同心の病といへるは、文字は変りたれども、心ばへの同じきなり」と言い、この歌を挙げ、「これは、山と峰となり。山のいただきを峰とはいへば、病にもちあるなり」と言っている。その「山」と「峰」の重なりを、右歌について同心病として俊成が指摘していないのは、見落としたのか、それともこの場合あえて指摘するのを避けたのか。いずれにしても俊成の批評の観点から、この種の歌病のもつ比重が軽くなりつつあったことを示すように思われる。

163 うきながら身をばさすがにすてやらであやまたぬよをうらみてぞふる

右

安心

164 よをすくふえびすの神のちかひにはもらさじものをかずならぬ身も左、身をばさすがになどいへるすがた、こころ、をかしくみえ侍り。

右歌は、すくふこころ、すこしことたがひたるやうにぞきこえ侍れど、えびすの神をかけたてまつれり。歌にまくべきにあらず。持などにや侍らん。

【通釈】

二十四番 左持

邦輔

163 (生きるのが) つらいと思ひながら、さすがに身を捨て去ることができず、この過ちのない世を、恨みながら過ごすことです。

右

安心

164 広く世の人々(の苦しみ)を救うという、えびすの神の誓願によると、とるに足りない私も、見捨てられはしないでしよう。

左の歌は、「身をばさすがに(捨てやらで)」などと詠んだ姿や心が、面白く思われます。

右の歌は、えびすの神が世を救うことの趣意が、いささか取り違えられているように思われますが、えびすの神の御名を取り入れて詠んだ作です。その歌として負にするわけにはゆかない。持あたりがふさわしいでしょうか。

【注】○あやまたぬ世 過ちのない世。治世。○よをすくふえびすの神のちかひ 「世を救ふ誓ひ」は、衆生を救おうとする誓願。もとは仏の誓願を言う言葉であるが、神仏習合の立場から、ここでは「えびすの神」の誓願として言った。「えびすの神」については、二番の「神にもあらぬえびす」の「注」参照。○ことたがひたる 事の趣意が違っている。本来の神仏の衆生救済の誓願から見て、ここで「漏らさじものを数ならぬ身も」と言うのは、安易な受け取り様だという指摘か。

『広田社歌合』注釈(二)

【考察】左の歌は、生きるのがつらいが、出家することもできず、世にながらえる身としての述懐である。右の歌は、西の宮のえびすの神の広く世の人を救う誓願で、数ならぬ自分も救われるだろうとの心を詠む。

俊成の判詞は、左の歌については、「身をばさすがに(捨てやらで)」などと詠んだ姿・心を「をかしく」見えると評価する。

右の歌については、えびすの神の人を救う誓願が、少し安易に受け取られている点を批判していると見られるが、神にかわる歌を負けにできないとして、持とする。

二十五番 左

懐綱

165 いたづらにとしはみそぢにあまりても身はかずならぬなげきをぞする

右勝

祐盛

166 かずならぬことのはこそはうれしけれうき身も人にしらるとおもへば

左歌、こころことばをかしくはみえ侍り。壮年のときは、潘岳がよはひにおよぶも、さこそはおぼゆる事に侍れど、それをうらやむ人もおほく侍らんかし。

右歌は、うき身も人にといへるこころ、をかしくこそ侍るなれ。かの能因法しをいふことばに、こころはな山のあとをねがひて、ことば人にしられたりといへる事をおもふに、心おごりに侍るべし。うたもげよろしくきこゆ。右のかちと申し侍るべし。

【通釈】

二十五番 左

懐綱

165 なす事もなく年をとり、三十を越えても、わたしは取るに足りない身であるのを、嘆くばかりだ。

右勝

祐盛

166 取るに足りないわたしの歌だが、うれしいものだ、——つらいこと

の多い身も、(これで) 人に知ってもらえらると思うと。

左の歌は、心も言葉も面白い作と思われれます。壮年の時は、藩岳が白髪の生えたのを知ったという三十過ぎの年齢になったことが、いかにもそのように(嘆かわしく)感じられることですから、またそれをうらやむ人も多いであらうと思います。

右の歌は、「憂き身も人に(知らると思へば)」と詠んだ心が、実に面白く思われるのです。あの能因法師について記した文に、「心、花の山の跡を願ひて、言葉、人に知られたり」(心に僧正遍昭の足跡にならうことを願って、その歌は広く人に知られている)と言っていることを思うと、得意になって当然のことでしょう。歌としても、まことに結構に思われる。右の勝と判定致しましょう。

【注】○潘岳がよはひ 潘岳が白髪の生えたのを知った(三十二歳の)年齢。潘岳は、字は安仁、晋の文人(二四七―三〇〇)。その「秋興賦」の序の冒頭に、「晋十有四年、余春秋三十有二、始見三毛。」とある。「三毛」は、髪に白髪がまじること。潘岳の「秋興賦」は日本にも早くから知られ、『文華秀麗集』(巻中)の仲科善雄の述懐の詩や、『本朝文粹』(巻一)の源英明の「見三毛」の詩などにも引用されている。○能因法しをいふことば 能因法師について記した『後拾遺集』序の一節を指す。「近く能因法師といふ者あり」の後に「通釈」に挙げた文が続く。能因は、俗名 橘 永愷、出家後諸国を旅した漂泊の歌人(九八―没年未詳)。○はな山 (ここでは元慶寺(花山寺)を創建した花山僧正と呼ばれた僧正遍昭を言う。遍昭は、俗名良岑宗貞、六歌仙の一人(八一六―八九〇)。○心おごり 得意になること。

【考察】左の歌は、三十歳を越えても数ならぬ身であることを嘆いている。右の歌は、取るに足りない自分の歌だが、これで憂き身も人に知られると思うとうれしいと詠んでいる。

俊成の判詞は、左の歌については、「心言葉をかしく」と一応評価した上で、三十歳過ぎの年齢で数ならぬ身を嘆くのは首肯されるが、そういう身をうらやむ人も多かるう、と言いつ添えている。これは作者を

慰めたのか、批判したのか、あるいはそのどちらでもない感想なのか、分りかねるところもあるが、いずれにしても五十九歳の俊成が人生の経験を積んだ立場から言った言葉であらう。

ちなみに俊成は、三十二歳で従五位上に叙せられるまで、約十八年間従五位下であった。三十二歳で白髪がまじるのを知ったという藩岳のことをここに引いたのも、俊成のそういう自身の過去を意識したことにかかわっているようにも思われる。

右歌については、「憂き身も人に(知らると思へば)」と詠んだ心を、「をかしく」と評価している。そして『後拾遺集』序の、能因が心に僧正遍昭にならうことを願ひ、その歌が「人に知られたり」という一節を引いて、歌で人に知られることを「うれしけれ」と詠んだ心を肯定していると思われる。その上で「歌もげによろしく」と評し、右の勝と判定している。

二十六番 左持

懐能

167 うしとてもこはたがためにともすればわが身をいとふころなるらん

右

憲経

168 かくてのみくちばがしたにうづもるこの身は神よあはれならずや

左、歌のころ、ことばづかひ、をかしくみえ侍り。

右、くちばがしたにうづもるこの身は神よなどいへるすがた、又わりなくみゆ。よりて持とす。

【通釈】

二十六番 左持

懐能

167 我が身がいとわしいといつても、これは一体だれのために、とすれば我が身をいとう心が動くのでしょうか。

右

憲経

168 ただもうこんな風で、朽ち葉の下に隠れたような、世に知られないこの身は、神よ、哀れに思われませんか。

左の歌は、その心や言い様が、面白く思われます。

右の歌は、「朽ち葉が下にうづもるるこの身は神よ」などと詠んだ姿が、また一通りのものでないと思われる。そのため、持とする。

【注】○くちばがしたにうづもるるこの身 不遇の身を言う。『堀河百首』に見える俊頼の述懐の長歌（一五七六、『千載集』一一六〇）の一節に、「これもさこそは みなしぐり 朽ち葉が下に うづもれめ」とある。

【考察】左の歌は、「憂し」と思う「我が身」を「いとふ心」について、一体「たがために」こういう心が動くのだろうかと詠んでいる。ここで「たがために」と疑問の形をとった作意は、十分に理解できないところが残るようで、あるいは基づいた歌などがあるのではないかとも思うが、目下見いだすことができない。

右の歌は、不遇の身を「朽ち葉が下にうづもるる」とたとえ、こういう身は「あはれならずや」と神に呼び掛ける形で詠んでいる。

俊成の判詞は、左歌については、心や言葉の用い様が「をかしく」見えると評する。

右歌については、二句以下四句までを引いて、その姿が「わりなく」見えると評する。「わりなく」と言ったのは、並々ならぬ切実な心の表現を認めたのであろうか。

### 二十七番 左持

よのなかにおきどころなくおもふ身はひろたの神をたのむばかりぞ

右

智 經 尹

170 とりのるしむかしにかへれかつまたのいけるかひなきわが身なげてん

左歌、こころすがたいうにこそみえ侍れ。

右歌の、むかしにかへれかつまたのといへるこころことはこそ、いとあはれに侍れ。これはかつとも申し侍るべきを、左うるはしく侍るうへに、す糸のくのことば、うたにまくべきにあらず。又

持とす。

### 【通釈】

二十七番 左持

智 經

169 世の中に、置き所がないと思う我が身は、（広く世の人々を救う）広田の神を頼る外はないのです。

右

智 經 尹

170 水鳥のいた昔の姿に返れ、勝間田の池よ、——その池に、生きていくかいてもないわたしは、身を投げて果てよう。

左の歌は、その心も姿も、優れたものに見えます。

右の歌の、「昔に返れ勝間田の」と詠んだ心と言葉は、大層心をうたれるのです。これは勝ると言ってもよいのですが、左の歌が整った様子に詠まれております上に、下の句の言葉の（神を詠み入れた）点で、歌としても負けにするわけにはゆかない。これも持とする。

【注】○かつまたのいけ 勝間田の池。所在未詳。『万葉集』（三八五）

に見えるそれは、大和、今の奈良市の唐招提寺・薬師寺付近にあったかと言われるが、平安時代以後の歌学書では、美作・下総等の説がある。これを詠んだ歌には、「勝間田の池にとりゐし昔よりこふるいもをぞけふいまにみぬ」（『古今和歌六帖』一〇六六）、「鳥もゐでいく代へぬらん勝間田の池にはいひのあとだにもなし」（『後拾遺集』一〇五三、藤原範永）など、古く水が失われた池として詠まれることが多い。なお右歌では「池」に「生ける」を掛けている。

【考察】左の歌は、世の中に身の置き所がない自分は、広田の神を頼るばかりだと詠む。「広田」の神の名に、広く世の人を救う神という意味をこめて詠んでいるのであろう。

右の歌は、「注」に引いた『古今和歌六帖』や『後拾遺集』の歌により、今は水のない勝間田の池よ、水鳥のいた昔の姿に返れ、そしたら生きるかいてもない自分は身を投げようと詠んでいる。ここで勝間田の「池」に「生ける」を掛けた技巧は巧みと見える。ただ、こういう掛詞

の前例には、

ねぬなはの苦しかるらん人よりも我ぞ益田ますのいけるかひなき〔拾遺集〕八九四、よみ人しらす〕

などがあり、作者独自のものではない。

俊成の判詞は、左歌については、心・姿が「優」に見えると評している。

右歌については、心・言葉が「いとあはれ」であると評している。そして、右歌を勝としたいようにも思うが、対する左歌は「うるはしく」詠まれているし、神の名を詠み入れているので負にできない慣例もあるとして、持と判定している。

## 二十八番 左持

阿闍梨姓阿

171 なにしおへばたのみぞかくるにしのみやそなたにわれをみちびくやとて

右

浄縁

172 かづらきやすがのはしのぎいりぬともうきななはよよにとまりな

ん  
左は、はじめ七番のつがひにや侍りつるうたのことばのつづき、いささかかはれるに侍り。

右は、すがのはしのぎなどいへるすがた、幽玄にこそきこえ侍れ。ただし、いづれもこのころのおもむきあはれにみゆ。なほ又持と申し侍るべし。

## 【通釈】

### 二十八番 左持

阿闍梨姓阿

171 西を名としてお持ちだから、西の宮の神に頼らせていただくのです、  
——西方浄土に私を導いてくださるかと思つて。

右

浄縁

172 葛城山かすらぎの、菅すがの葉を押し伏せて、山深く入つたとしても、私についてのつらい噂うわさはやはり、世に残るに違いないのです。

左の歌は、先に七番にあったかと思ひます歌の言葉続きが、少し変わったような作です。

右の歌は、「菅の葉しのぎ」などと詠んでいる姿が、幽玄に思われまふ。ただし、左右の歌はいずれも、心の様子があわれに見える。やはりこれも持としようと思ひます。

【注】○にしのみや 西の宮。七番の「にしてふ神」の「注」参照。

○かづらき 葛城山かすらぎ。大和の国の歌枕。今の奈良県の西、大阪府との境にある連山。修験道の霊場とされた。○すがのはしのぎ 菅すがの葉を押し伏せて。スガはスゲと同じで、カヤツリグサ科の植物。その葉は細長く、先がとがる。『万葉集』に、「奥山の菅の葉しのぎ降る雪の消なば惜しけむ雨な降りそね」(三〇二、大納言大伴卿)、「高山の菅の葉しのぎ降る雪の消ぬとか言はも恋の繁けく」(六五九、三国真人人足)等の用例が見える。○うきな 憂うれき名 つらい評判。

【考察】左の歌は、西の名をもつ西の宮の神を頼りにする、それは西方浄土へ自分を導いてくださるかと思うので、との心を詠む。俊成も判詞に言うとおり、七番左の俊恵の歌、

名にしおはば西てふ神をたのみおかんそなたをつひに願ふ身なれば  
とよく似た歌である。

右の歌は、葛城山深く「菅の葉しのぎ」入つても、自分についてのつらい評判は世に残るに違ひない、と嘆いた作である。「菅の葉しのぎ」は、「注」に用例を挙げたが、『万葉集』の歌で奥山に降る雪の形容に用いられている言葉だけに、俗世を遠く離れる心を印象づけるところがあると思ふ。

俊成の判詞は、左歌については、七番左の歌とよく似た表現である点を指摘する。ただし、これは欠点として言つたのではなからう。

右歌については、「菅の葉しのぎ」などと詠んだ姿を、「幽玄」と評している。「菅の葉しのぎ」は、先に触れたように『万葉集』に見える古い歌詞で、俗世を遠く離れた深山の趣を漂わせる表現である点を、

「幽玄」と評したのかと思う。しかしその上で、左右の歌はともに心のあり様が「あはれ」に見えると言いい、持としている。

二十九番 左勝

中納言君

173 みなそこにわが身はしづみはてぬれしづみはてぬれば(静曹類伝、歌合部題)とうきをながすせぞかはらぬ

右

素 覚

174 はなさかぬわがおいきにはとしをへて身のなるさまぞあやしかりける

左歌、みなそこにしづめる心、あはれにこそみえ侍れ。はまのみなみの神、感さだめて侍らんや。

右歌の、おいきの身のあやしくなる事も、げにさる事とは思ひしられ侍れど、なほ左のわが身はしづみはてぬれどといへる、あはれふかく、すがたをかし。よりて為レ勝。

【通釈】

二十九番 左勝

中納言君

173 水底みぞに沈むように、私は落ちぶ果れてた身になったが、折々につらいうわさが流されることは、一向に変わりません。

右

素 覚

174 花の咲かない古い木のような私には、年を重ねてゆくと、この身がどんな風になるのか、いぶかしく思われるのです。

左の歌は、水底に沈んだような(おちぶれた)身だという心が、あわれに思われます。浜の南の宮の神も、おそらく感心なさることでしょうか。

右の歌の、古い木のような身の後の様子がいぶかしく思われるというのも、実にもつともなことは理解されますけれども、やはり左の歌の「我が身は沈み果てぬれど」と詠んでいるのが、あわれも深く、姿も面白いと思う。そのため(左を)勝とする。

【注】○せぜ 折々の意であるが、瀬々を掛けて「水底」「沈み」「う

き)「流す」などと縁語になるように仕立てた。こういう「せぜ」の掛詞的用法の例は少ないが、『源氏物語』(早蕨)に見える歌「身を投げむ涙の川に沈みても恋しきせぜに忘れしもせじ」の例がある。○身のなるさま わが身のなる状態の意であるが、「身のなる」に「実の生る」を掛けて「花咲かぬ」「古い木」などの縁語に仕立てた。○はまのみなみの神 浜辺にある「南の宮」の神。「南の宮」は、広田神社の境外摂社で、源頭仲が『南宮歌合』を催した社。

【考察】左の歌は、我が身は「沈み果て」たが、折々に「憂き名を流す」立場に置かれるのは変わらぬ、と嘆いた心であろう。表現技巧として、上の句の「水底」「沈み」、下の句の「浮き」「流す」「瀬々」を縁語として織りこみ、それも上の句と下の句とで対照的な言葉を用いた工夫がうかがえる。

右の歌は、「花咲かぬ」「古い木」のような我が身は、これから年を重ねて「身のなるさま」がどんな風なのか、いぶかしく思われる、という内容で、老残の身を嘆く心を基調にした作であろう。「身のなる」に「実の生る」を掛けて、「花咲かぬ」「古い木」に対応する縁語に仕立てている。

俊成の判詞は、縁語などの技巧には触れず、歌の心に重点を置いて記している。左歌については、「水底に沈める心」を「あはれ」と評している。「浜の南の神」も感心されようと言ったのは、水に縁のある神と見たのであろう。

右歌については、その心を「げにさる事」と思い知らされると、一応評価はしているが、やはり左歌が「あはれ深く、姿をかし」と高く評価して、左が勝ると判定している。

○俊成の歌

175 しきしまやみちはたがへずとおもへども人こそわかね神はしるらん

【通釈】

175 和歌の道を正しく守ることを心掛けているが、この心を、人は(知っ

てくれるかどうか) 分かってくれなくても、神は御承知くださることであろう。

【注】〇しきしまやみちは 和歌の道については。「しきしまや」は「しきしまの」と同様に「やまと」の枕詞に用いられる語で、この場合の「道」は「やまと歌の道」の意。

【考察】これは俊成が判詞の後に書き入れた歌で、この歌を収めた『新拾遺集』の詞書には、

承安二年広田社歌合を判じける奥に書付け侍りける。とある。

一首は、和歌の道の伝統を守ってゆこうとする自分の心を、神は御承知くださることであろうと詠んでいる。俊成が『広田社歌合』の判者としてとった基本的態度を明らかにするために書き添えたものであろう。

『広田者歌合』の姉妹編とも言える、二年前の『住吉社歌合』では、俊成は判者として跋文を書いている。ここでは、和歌の道が深く広いことを言い、歌の価値を客観的に判定するのは困難であるが、歌道の衰退を座視するにしのびず、あえて判詞の筆をとった旨を記していた。今はそれと重複して記すことを避ける意味もあって、信念を歌一首に託して書き添える形にしたのであろうと思う。

【備考】この俊成の歌は、『新拾遺集』(一四三三)に収められている。

○作者一覽

○アラビア数字は、作者の歌の見える番数を示す。  
○傍線の作者は、『住吉社歌合』の作者でもあることを示す。

1	共通 きんみち 藤原公通。権中納言通季の子。正二位按察使権大納言に至る。一一一七—一一七三。
2	重家 しげいえ 藤原重家。左京大夫頭輔の子。非参議従三位大宰大式に至る。家集『重家集』一一二八—一一八〇。
2	実定 さねさだ 藤原(徳大寺)実定。右大臣公能の子。母は俊成の姉。

3 正二位左大臣に至る。家集『林下集』。一一三九—一一九一。  
頼政 よりまさ 源頼政。兵庫頭仲正の子。従三位に至る。武將として以仁王を奉じ平家と戦い、敗れて宇治で自害。歌林苑の会衆。家集『源三位頼政集』。一一〇四—一一八〇。

小侍従 こじじゅう 石清水八幡宮別当紀光清の女。二条天皇に出仕、のち太皇太后宮多子、さらに高倉天皇に仕えた。家集『小侍従集』。生没年未詳。

実房 さねふさ 藤原実房。内大臣公教の子。正二位左大臣に至る。一一四七—一一二五。

4 実国 さねくに 藤原実国。内大臣公教の子。前出の実房の兄。正二位権大納言に至る。家集『実国集』。一一四〇—一一八三。

5 師光 もろみつ 源師光。大納言師頼の子。左大臣藤原頼長の猶子。官途は正五位下右京権大夫で終わる。法名生蓮。家集『師光集』。生没年未詳。親連 かんれん 俗名藤原教長。大納言忠教の子。参議正三位左京大夫に至るが、保元の乱で敗走、出家、配流後召還。家集『貧道集』。一一〇九—一一八〇ころ没か。

6 実綱 さねつな 藤原実綱。内大臣公教の子。前出の実国・実房の兄。正三位権中納言に至る。一一二六—一一八〇。  
三河内侍 みかわのし 藤原為業(たけなり) (寂念)の女。二条院に出仕。のち後白河院女御珠子に仕えて兵衛佐と呼ばれた。(『住吉社歌合』では兵衛佐とある。)歌林苑会衆。生没年未詳。

7 実守 さねもり 藤原実守。右大臣公能の子。前出の実定の弟。従二位権中納言に至る。一一四七—一一八五。

俊忠 しゅんえ 木工頭源俊頼の子。東大寺の僧となる。白川の自坊歌林苑に広く歌人たちを集めて交流の場とし、歌合や歌会を催した。家集『林葉集』。一一三三—没年未詳。

俊成 しゅんげい 藤原俊成。権中納言俊忠の子。早く葉室頭頼の養子となり、名を頭広と称したが、のち本流に復して俊成と改名。正三位非参議皇太后宮大夫に至る。一一七六年出家、法名は釈阿。多くの歌合の判者を務め、歌壇の指導者として認められた。『千載集』を撰進。家集『長秋詠藻』、歌学書『古来風体抄』等を残す。一一二四—一一〇四。

8 成範 しげのり 藤原成範。もと成憲。少納言通憲(しんげい) (信西)の子。正二位中納言民部卿に至る。一一三五—一一八七。

15	14	13	12	11	10	9
<p>道因 どういん 俗名藤原敦頼。治部丞清孝の子。従五位上左馬助になるが、一一七二年出家、法名道因。歌林苑会衆。一〇九〇—没年未詳。</p> <p>政平 まさひら 賀茂政平。神主成平の子。片岡社の禰宜になった。歌林苑の会衆。生年未詳—一一七六。</p>	<p>顕広王 あきひろおう 安芸権守顕康王の子。正四位下神祇伯に至る。生没年未詳。</p>	<p>修範 ながのり 藤原修範。少納言通憲(信西)の子。前出の成範の弟。</p> <p>寂念 じゃくねん 俗名藤原為業。丹後守為忠の子。従五位下皇后宮権大進に至るが、一一五八年から一一六六年の間に出家、大原に住む。生没年未詳。</p>	<p>頼実 よりざね 藤原頼実。左大臣経宗の子。従一位太政大臣に至る。一一五—一一二五。</p> <p>季経 すえつね 藤原季経。左京大夫顕輔の子。前出の重家の同母弟。非参議正三位に至る。清輔没後は六条藤家の代表歌人と目された。家集『季経入道集』。一一三一—一一二二。</p>	<p>隆信 たかのぶ 藤原隆信。皇后宮少進為経(寂超)の子。母の美福門院加賀は、のち俊成と再婚。正四位下右京権大夫に至る。家集『隆信集』。一一四二—一一〇五。</p> <p>実宗 さねむね 藤原実宗。権大納言公通の子。正二位内大臣に至る。一一四九—一一二二。</p>	<p>大輔 たいふ 殷富門院大輔。散位従五位下藤原信成の女。後白河院皇女亮子内親王(殷富門院)に出仕。歌林苑の会衆。家集『殷富門院大輔集』。一一三三—一一二〇。</p> <p>経盛 つねもり 平経盛。刑部卿忠盛の子。清盛の弟。正三位参議に至る。壇の浦の合戦に敗れて入水。家集『経盛集』。一一二四—一一八五。</p> <p>実宗 さねむね 藤原実宗。権大納言公通の子。正二位内大臣に至る。一一四九—一一二二。</p>	<p>盛方 もりかた 藤原盛方。中納言顕時の子。従四位下中宮大進、出羽守になる。歌林苑の会衆。一一三七—一一七八。</p> <p>実家 さねいえ 藤原実家。右大臣公能の子。前出の実定の弟、実守の兄。正二位大納言に至る。歌林苑の会衆。家集『実家集』。一一四五—一一九三。</p> <p>登蓮 とうれん 系譜未詳。僧で、歌林苑の会衆。数寄者として『無名抄』に逸話がある。家集『登蓮法師集』。生没年未詳。</p>
23	22	21	20	19	18	16
<p>季定 すえさだ 藤原季定。『住吉社歌合』には散位従五位下と記される</p> <p>佐 けるが、系譜、経歴等未詳。</p> <p>右大臣藤原公能(広田社歌合の当時故人)の家の女房と思わ</p>	<p>仲綱 なかつな 源仲綱。前出の従三位頼政の子。正五位下伊豆守になるが、宇治川の合戦に敗れ、父とともに自害した。歌林苑の会衆。一一二六—一一八〇。</p>	<p>顕綱王 あきつなおう 前出の神祇伯顕広王の子。従四位下になる。生没年未詳。</p> <p>隆親 たかちか 藤原隆親。左兵衛佐隆教の子。従五位下内蔵権頭になる。生没年未詳。</p>	<p>季広 すえひろ 源季広。木工権守季兼の子。正五位下下野守になる。歌林苑の会衆。生没年未詳。</p> <p>伊綱 これつな 藤原伊綱。刑部少輔家基の子。従五位下中務少輔になる。歌林苑の会衆。生没年未詳。</p>	<p>朝宗 あさむね 藤原朝宗。『住吉社歌合』には駿河権守従五位下と記されるが、系譜、生没年等未詳。</p> <p>親重 ちかしげ 藤原親重。もと憲親。佐渡守親賢の子。従五位下美濃権守になる。のち出家、法名勝命。一一二—没年未詳。</p>	<p>広言 ひろとき 惟宗広言。日向守基言の子。従五位下筑後守になる。歌林苑の会衆。家集『広言集』。生没年未詳。</p> <p>馬守になるが、一の谷の合戦で戦死。琵琶の名手。歌林苑会衆。家集『経正朝臣集』。生年未詳—一一八四。</p> <p>広季 ひろすえ 中原広季。大学寮直講広忠の子。従四位下大学寮博士になる。生没年未詳。</p>	<p>憲盛 のりもり 藤原憲盛。女蕃助為兼の子。『住吉社歌合』に散位従五位下と記されている。生没年未詳。</p> <p>重保 しげやす 賀茂重保。神主重継の子。正四位上、賀茂別雷社神主に。歌林苑の会衆。『月詔和歌集』を編む。一一一九—一一九一。</p> <p>通清 みちきよ 源通清。(住吉社歌合)には「源朝臣宗長(通清)」とある。</p> <p>資隆 すけたか 藤原資隆。もと季隆。豊前守重兼の子。従四位下少納言に至る。歌林苑会衆。家集『禪林歌集』。生没年未詳。</p>

29	28	27	26	25	24
<p>中納言 ちゆうなごん 殿富門院中納言。右近少将源通家の女。生没年未詳。 素寛 そかく 俗名藤原家基。伯耆守家光の子。前出の伊綱の父。従五位 下刑部少輔になる。出家し、法名素寛。歌林苑の会衆。生没年未詳。</p>	<p>浄縁 じようえん 叡山阿闍梨となった静縁か。静縁は『無名抄』に逸話 が見えるが、系譜、生没年未詳。 阿闍梨 じやうり 梨大法師と記される。生没年未詳。</p>	<p>経尹 つねまさ 藤原経尹。皇后宮大進懐経（前出の懐綱、懐能の兄）の 子。従五位下左兵衛尉になる。生没年未詳。 姓阿 しょうあ 大学助藤原雅親の子の性阿か。『広田社歌合』には阿闍 梨大法師と記される。生没年未詳。</p>	<p>懐能 かねよし 藤原懐能。下野守懐遠の子。前出の懐綱の弟。従五位上 大宮少進になる。生没年未詳。 憲経 のりつね 藤原憲経。前出の道因（敦頼）の子。『住吉社歌合』に は正六位上と記される。歌林苑の会衆。生没年未詳。 智経 ちきよう 『住吉社歌合』には大法師と記されるが、系譜、生没年 未詳。</p>	<p>懐綱 かねつな 藤原懐綱。下野守懐遠の子。従五位上主殿助になる。生 没年未詳。 佑盛 ゆうじよう 木工頭源俊頼の子。前出の俊恵の弟。叡山阿闍梨。歌 林苑の会衆。一一一八—没年未詳。 懐能 かねよし 藤原懐能。下野守懐遠の子。前出の懐綱の弟。従五位上 大宮少進になる。生没年未詳。</p>	<p>邦輔 くにすけ 藤原邦輔。大舍人助成方の子。前出の道因（敦頼）の甥。 正五位下皇后宮権大進になる。生没年未詳。 安心 あんしん 系譜、経歴未詳。 懐綱 かねつな 藤原懐綱。下野守懐遠の子。従五位上主殿助になる。生 没年未詳。</p>

が、系譜、生没年等未詳。

広盛 ひろもり 平広盛 前出の参議経盛の子。従五位下刑部大輔になる。

生没年未詳。

邦輔 くにすけ 藤原邦輔。大舍人助成方の子。前出の道因（敦頼）の甥。

正五位下皇后宮権大進になる。生没年未詳。

安心 あんしん 系譜、経歴未詳。

懐綱 かねつな 藤原懐綱。下野守懐遠の子。従五位上主殿助になる。生  
没年未詳。

佑盛 ゆうじよう 木工頭源俊頼の子。前出の俊恵の弟。叡山阿闍梨。歌

林苑の会衆。一一一八—没年未詳。

懐能 かねよし 藤原懐能。下野守懐遠の子。前出の懐綱の弟。従五位上

大宮少進になる。生没年未詳。

憲経 のりつね 藤原憲経。前出の道因（敦頼）の子。『住吉社歌合』に

は正六位上と記される。歌林苑の会衆。生没年未詳。

智経 ちきよう 『住吉社歌合』には大法師と記されるが、系譜、生没年

未詳。

経尹 つねまさ 藤原経尹。皇后宮大進懐経（前出の懐綱、懐能の兄）の

子。従五位下左兵衛尉になる。生没年未詳。

姓阿 しょうあ 大学助藤原雅親の子の性阿か。『広田社歌合』には阿闍

梨大法師と記される。生没年未詳。

浄縁 じようえん 叡山阿闍梨となった静縁か。静縁は『無名抄』に逸話

が見えるが、系譜、生没年未詳。

中納言 ちゆうなごん 殿富門院中納言。右近少将源通家の女。生没年未詳。

素寛 そかく 俗名藤原家基。伯耆守家光の子。前出の伊綱の父。従五位

下刑部少輔になる。出家し、法名素寛。歌林苑の会衆。生没年未詳。